

〔寄宿舎日記・昭18年〕

一月一日 金曜日 雪の裡に年は明けた。午前六時舎生一同札幌神社に参拝する。札幌の正月、又内地の正月と趣を異にして居る。戦時下のせいもあらうが、有りや無しやの門松やしめ縄もなし。しし舞も来ない正月では気分の出ないことおびたしい。北村さんが年始にこられた。三村さん飯島さん等先生、先輩の所に年始に行く。夜安部川をして皆で食ふ。ストーブで焼く餅の味も又格別である。

一月二日 土曜日 暮からの歯痛ひどく歯医者を軒並みに訪ふも皆ことわられる。遂に日高行きを断念せざるを得なくなった。夜六号室で又安部川の店をひろげる。(大泉)

一月三日 日曜日 別にかわったこともない。三宅どんからお便りあり。小生歯痛のため室にひきこもり。

一月四日 月曜日 晴天 ものすごく良い天気だ。岩瀬君足に薬を塗りながらスキーに出かける。やっと歯の手当をしてもらふ。今晚も又安部川、安部川に少々食傷気味である。飯島さんは塩と砂糖を間違へそうになる。

一月五日 火曜日 晴天 岩瀬君とスキーに出かける。円山を経て幌見峠に至り、しばしゲレンデの後、夕闇の裡を下る。楽しい一日であった。

一月六日 水曜日 愈々休みも残り少なくなった。夜三宅さん帰舎された。

一月七日 木曜日 正月の休みもついぶらぶらと過ごしてしまった。明日から予科は始まる。新たなる決意を持って進もう。四号室で最後の安部川を食ふ。夜北野、河瀬、土居君等帰舎す。

一月八日 金曜日 予科は今日から始まった。学校へ行ってみると未だ帰らぬ者も相当に居る。学部が休みのせいか、学校へ行っても未だ何となく簡散で休みの様な気がする。夕方から街へ出る。

一月九日 土曜日 舎中平穩、夜内田君帰舎す。

一月十日 日曜日 三村さん、三宅さん春香山へ出かける。望月さんやと士別から御帰り。中村、佐本両君帰舎す。皆それぞれ楽しい正月を過ごして来た由。

一月十一日 月曜 雨 昨日から暖かいと思ったら昼から雨が降り出した。三時限から予科長の訓示が体操場で行はれ、その後電車通りの雪ふみを行った。

一月十二日 火曜日 舎生も大部帰舎した。又雪が降り出す。ストーブの石炭配給を各自取りに行くのをはやく当番制にしたほうが良いと思ふ。

一月十三日 水曜日 今日朝から雪降り。菅沼さんは未だ帰舎されない。やはり副舎長が不在だと何となく舎内がまとまらない様な気がする。此年になってから舎生のまかなひ買出しをしないためのエッセンが総じて悪くなった様な気がする。

一月十四日 木曜日 予科は始まってからも一週間たった。月日のたつのは早いものだ。太田さんは東京へ行っているらしい。十五二十日頃札幌へ現れると云ふことであるから明日あたり会へるかもしれない。

一月十五日 金曜日 夕方から雪降り。夕食を摂る為皆々食堂に集ひたる時菅沼副舎長か

ら飛電ありて曰く「コンヤツクストータノムすが」と、けだしストーとはストーブのことならん。或はストームならんか。夜副舎長帰舎、急ににぎやかになる。

一月十六日 土曜日 晴天 午後飯島、三村、土居の面々ゲンチャンに行く。小生三角山へ行くもスラロームの練習中なるに附、中途より幌見峠へ行く。峠につけば早夕闇せまり札幌の炉は点々と輝く。戸田、岡本両氏に会ふ。しばしゲレンデの後五時半頃峠を下る。月光のもれる林の中は正に別天地也。

一月十七日 日曜日 薄曇り 三宅さん、土居君春香山へ行く。大泉砥石山へ行く。風もなく絶好のスキー日和であった。

一月十八日 月曜日 雪 予科、医、理類円山でスキー教練。夕方から雪も止み二子山も降雪の為ガリガリでなくなって居たので快適であった。

一月十九日 火曜日 夕方四時半から、えび天で菅沼副舎長の全快祝ひを行った。集ふ者十六人。副舎長の話があつてから天ぷら一人半前づつ平げた。快適快適。有志はその後オリンピヤへ、又オカメへと沈没した。

一月二十日 水曜日 一月も早二十日になった。正月気分もぬけ切れて舎内も平常の通りになった。実に二年ごしで四号室に停滞して居た日記もそろそろ他の部屋をのぞきたいことであらう。今朝舎の前の通りの除雪を行った。

一月二十一日 木曜日 今日太田さん帰舎の電報受けしも、一寸の手違ひから迎へに行けなかつた事は残念だった。然し前より一層の元気で御帰りになられた事を喜ぶ。副舎長室にて太田さん土産の林檎に話は流れて大変にぎやかな集ひとなる。愉快なりし一日。

一月二十二日 金 夜、一月の会計、副舎長室にて行はる。二十円足らずでほっとする。その後、シルコの御馳走ある。大いに美味であった。もう一寸と云ふ處がよいのだ。

一月二十三日 土 平凡なりし一日。寒いから外へ出る人もない。

一月二十四日 日 健さん、三村さん、太田さん、澤井さん、岩瀬、内田、秋葉さん、大泉、増原さん、望月くん、スキーに出掛け、以外の者はピンポンに興ずる。大分風もあつて寒かつた一日。岩瀬急用ありて帰省。

一月二十五日 月 一年スキー教練。他に変わった事なし。予科今日から寒稽古。

一月二十六日 予科文化講義。講師、児島喜久雄。芸術論なる題目。〔四字判読困難、ダビエンチ?〕の絵の説明、流石は権威なる哉。大分面白かつた。

八百の活視をあびて教壇に、ひとり居て思ふごと、絵をとく偉大なる君

一月二十九日 月次会。宮部先生、亀井先生出席の下月次会。特に宮部先生には、先生の御視線について話して下され感銘深し。舎生の各々の意見も興味深く聞く。

一月三十日 明日手稲登山を舎にて行ふ。夜準備に余念なし。

一月三十一日 鈴木先生も御出席下され手稲登山。朝早く起きて汽車に乗る。快適の雪。冬山の壮観と共に思ふ存分愉快地に遊ぶ。思ひ出深き日と成らん。

〔寄宿舎日記・昭18〕

二月一日 もう二月だ。早い物だ。然し札幌へ来て随分経った様な気がする。

二月二日 予科、二月十八—二十五日迄と試験発表。学部、実科の者羨ましが。快適！

二月三日 今夜はまめまきだ。札幌は淋しい。しきりに家の事が思ひ出される。

○故郷は節分（まめまき）ならん 吾は今 雪を踏みつゝ 遥かに偲ぶ

二月四日 “ふるさとの風” 予科にて見学許可、私も見学してくる。舎に変わった事なし。

二月五日 明日は北大創立記念日にて学校ナシ。

○二日なる休ミの前の夜なれば おだやかなるぞ 今日の集ひは

二月六日 別に変わった事なし。私の誕生日なれば胴上げされる。

二月七日 将兵に慰問文を公区から送る由。舎にては女〔一字不明〕にて各々記す事に決定。兵隊さんの方や如何？

○銃をとり 祖国の為に 戦へる 祖国の勇士ぞ 武運を祈る

◎不注意から日誌を廻さずにみた、真にすみませんでした、御詫び申します。北野記

二月八日 配給のバター、チーズ、ジャム等の籤引をする。チーズは土居君に、バターは小生にあたる。

二月九日 朝起きると肩がヒヤリとし又床の中にもぐりこむやうな寒さである。

二月十日 予科試験近づく。あと一週間。もう二週間すると又東京に帰れるとは喜ばしき限である。（河村）

二月十一日 悠久二千六百余年前の今月今日、我が帝国の基は築かれた。意義深き今日、全学生、生徒は、儀式終了後、札幌神社、護国神社に参拝する〔一字不明〕し、市内を堂々行進した。今暫し吾々が歴史を偲べばその源は神秘なる神話と化し到底極めることは出来ぬ。が、歴史的事実として吾々が認めて以来既に二千六百年を超えてゐる。その間、肇国の精神の顕現である種々の歴史が続けられて来たやうであるけれども、今日、行はれてゐる、築かれつゝある歴史位大きなものは無いと思ふ。従つて又、之を建設するにより多くの人材を要する事切である。然も英雄の少数よりも充実した多数の人を要すると云はれる。一寸の光陰を惜んで益々励まねばならぬ意を強くした。（佐本）

二月十二日（金） 今朝太田、中村両君ノ後輩来タリ。受験ノ為トノ事、大イニ頑張ルベシ。目出度ク入学サレン事ヲ祈ル。舎生諸君モヨロシクタノム。

二月十三日 土曜日 晴 予科生は試験を目前に控へた土曜日である。午後中央講堂で映画等する。夜汁粉が出る。

二月十四日 日曜日 晴 久し振りにゆっくり眠る。起きて窓を明けたら朝日がぱっと入って来た。良い天気だ。スキーにも出て行くのだったと悔やまれてならぬ。舎生殆ど全部在舎、予科生試験の為だらう。屋根の雪も大分融けて来た。暖かくなったものだ。春遠からじ、の感がする。食堂が大分雨もりしてゐる。屋根の氷を落して見たが大分トタンがいたんでゐる。丁寧に氷を落さなくては雨もりはやみそうもない。未だ寒いから良いが、今に各部屋も雨もりするのではないか。帰省前是非部屋の上の氷を落してゆか

ねばなるまい。太田君の後輩本日帰る。 三宅

二月十五日 月曜日 雪が振る。特記事項なし。手稲登山を思ひ浮べて歌三首。

○静かなる 山間の雪路 たどり来て 何やらうれし パラダイスヒュッテ

○松の木は いづこも同じ 濃緑に 深雪にかほる 山のいたゞき

○やはらなる 雪間にしげる 木々さけて ふゞく山壁 ひたくだり行く

二月十六日 火曜日 昨日の雪が大分積って居る。全く札幌の雪の多いのには驚く。予科はもう直試験なので皆勉強に急がしい。

二月十七日 水曜日 十八日より学年末の試験始まる為、猛勉強中の様子舎内大変静かなり。夜お菓子の配給あり。 岩瀬

二月十八日 木曜日 晴一時雪 今日から愈々試験が始った。舎内は平生とは打って変って、大分静かだ。此の二三日、大分温暖で、お天気も良く、朝起きると窓のカーテンの隙間から、植物園の樹にかかってゐる太陽を拝める。 (秋葉)

二月十九日 金曜日 舎内は平穩。皆試験勉強で、張り切ってゐる。

二月二十日 土曜日 予科のとき。中間の休みが、如何にオアシスであったかといふ事を考えると、予科の人達が、今日の土曜日をのんびりとしてゐるのが、微笑ましくなってくる。寒さは大辺きびしい。だが、寄宿のスロープに戯れる幼児達はなんと健なことだらう。自分も二十の上になってしまふと、そろそろ十年昔のことを忘れかけて来るが、当時の面影、夢に画いた事ぐさが、私の心を快い思ひ出に誘ふ。 望月記

二月二十一日 予科の試験も峠を越したと云ふ所、学部はあと何日あるのだらう。あと三日で休み、どんなになってもかまはない。早く休みが来ればよい。舎内も非常に静かだ。(土居)

二月二十二日 (月) 試験で舎内の空気も憂々しい。予科の試験もあと一日で冬も峠を越して春に向う心地らしい。健さん今日で学生々活最後の試験の終止符を打つ。日中は軒々からポタリポタリと雨だれがノドカに落ち、今日は道の雪が融けてぬかるむ。夜はストーブの火も暖かな夜をねむさうにコトリコトリと燃へる。すべてのびんとするものは、先づ静かに内に燃えるものである。 飯島

二月二十三日 (火) 試験が済んだ。天気はゆるんだ。のどかな風気が訪れた。だが学部の人達や僕達はまだまだこれから試験だ。皆急に気が楽になり、時間をもて余して居る。追記 僕達もしっかりやって早く休みたい。 中村

八時より決算を行ふ。その後乾パンを噛りながら、休み中の事を取決める。今度入舎される石川君が面談に来て行った。

二月二十四日 (木) 予科の人達は皆帰省の準備に忙しそう。岩瀬君、河村君、河瀬君夫々帰省す。大泉君は十勝の山へ出発。中村君佐本君、英語の試験が明日あるので、猛勉強。夕方近くより雪が又降って来た。舎内平穩。其の他変った事なし。

二月二十五日 大分帰省して、静かになった。朝六時の汽車で、健さんハ旅行へ、北野ハ甲府へ夫々出発した。小生、朝から学校で製図を書く。午後六時迄続けたが、腹が空い

てたまらぬので、帰舎した。二十六日に帰る予定だったが、どうも不可能となってしまった。あんまり製図が、時間を要するものだから。今日、パンの配給があったので、皆、大喜びだ。飯島さんハ、勉強に夢中。残ってゐる連中が、いずれも勉強家ばかりで、舎ハ落付いて良い。 三村

十時過ぎに激励の意味にてか外出先より戻れる二人、外にて亦屋根にてストームやり居れり。飯島君明日試験終るといふ。

二月二十六日 春は土からかすかに動く。池の辺の草の緑が仄かに見えてきた。増原君、江別町村牧場へアルバイトに行かる。ミルク、バター等々の栄養によって大いに肥へて来ることならん。飯島君、試験終り明日帰省の予定。三村君、製図を書き終へねば帰れぬさびしさよ。飯も食えず十五時間位のアルバイトをしてゐるやも知れず。何卒早く母上の御膝下へ帰るによい様に。太田君相不変消耗し、彼の白髪は増したりしならん。菅沼君元気、望月君猛勉、現在十名。

二月二十七日（土） 飯島、三村両君、九時にて帰省す。終る〔意味不明〕帰るべき舎生はずでに帰り、あとしばらく帰省者続かぬだろう。残念な事に澤井君退舎。しかし、下宿はひじょうな立派な家庭的な所らしいので君の為にもよいと思つて許可す。（菅沼）

二月二十八日（日） 今日より淋しい残留組の生活、三宅、太田、望月、中村、内田、佐本、それに小生、以上七名。三宅君手稲にスキー。毎日の不味な野菜の煮付け〔一字不明〕合もつらい。

〔寄宿舎日記・昭18・3〕

三月一日（月） 満州建国十一周年記念日。朝起きて見たら二三寸雪が降って居た。気温の高い故か、雪も水気を帯びてゐる。昨日手稲に登ったが頂上の何時もは粉雪にて快哉と叫びつゝ、クリスチャニヤを楽しむ場所すら雪がなくて、容易に曲がらぬ。況んや下に於ておやだ。が下つて峽の雪の上に寝ころがって一休みした時春近い事をひしひしと感じた。夜以前賄をやってゐた王野さんが、愈々待望の南洋へ出掛けるといふので挨拶に来られた。九時十二分発、札幌をたゞれた。（三宅）

三月二日 月日の経つのは早いもので、三月も二日にもなり、次第に試験に近づくのが淋しく感ぜられる。何時迄経つても、思った様に勉強は出来るものではない。予定表は延期される…。王野さんから頂いた牛乳を暖めて、晩、さゞやかな六人のコンパをやる。猶、夕食のエッセンが天婦羅だったのは、有り難かった。春の陽ざしは、日中等は本格化し、長靴がもり出して弱つてゐる。赤いコート of 娘さんの姿もまばゆく、目に映る様になつて来た。次第に冬の重い空気が一枚々々剥がされて行く様な感もする。内地に帰省した連中もよほどのんびりしてゐることだらう。春の歌を大きな声で朝っぱらから、唱つてゐる内田君にも、やはり春の息吹が感ぜられたのか。（望月記）

三月三日 舎生七人の毎日は淋しい物足りない感じがする。試験が一日々々と近づく。苦しくなると、考へまいとしても家へ帰つて楽しく過してゐる予科生のことが浮ぶ。学部

の配属将校重松大佐は少将に昇格して大学を去る。午後一時半から送別式があった。日が長くなって午後の陽は春らしく暖かく成った。(佐本)

三月四日(木) 掲示板に五時四号室にてスキ焼きで夕食をとるの告示。一日中の楽しみなり。狭き室に火鉢二つ、菅沼さん、三宅さん、太田さん、望月さん、大泉君、佐本君、小生と三宅さんが学校から持って来られた牛の肉をつまぐ。軟く実に美味なり。満腹。それに尚、配給の生菓子あり。これ又甘く全部食うこと出来なかった。試験は何処へと楽しい一刻を過す。消化剤といて、エビオスを呑み込み床に入る。(中村)

三月五日(金) 朝七時頃、帯広より予科受験のため、四人到着。今日はそれで午後五時の夕食は会食とした。昨日の飽食で本日は腹一杯、昼食を抜きにした。(中村)

三月六日(土) 実科の試験が近づいたので、中村、佐本両君は猛勉をしてゐる。朝は早くから、夜は真夜中の一、二時頃迄、大変な頑張りである。(内田)

三月七日(日) 前夜の雪五寸許り積ってゐる。三宅君奥手稲へと朝早く出かける。太田君(これは自分のことであるが)三角山へと腹へらしに行く。彼は腹へらず困ってゐる。中村、内田、佐本の諸君猛勉。特に内田大人すごし。望月中尉(もう少しでなるのです)悠々と御勉強。宿泊中の帯広中学生、仲々愉快地にやっけてゐる。三日月が鋭くエルムの梢にかゝってゐる。明日は晴だ。大泉君、大きなリュックになひ、スキー持参帰省す。三宅、太田、内田三名が見送り「俺も汽車にのりたいなあ」と嘆ぜるは、いずれの人ぞ…  
太田記

三月八日(月) 工学部新学期開始。飯島(メシジマ)、三村両兄、未だ帰らず。早く帰ってもりもり飯(メシ)を食ったらいゝにと思ふが。本日で志願者の体検終る。旅館宿泊者、今日より三日間、三食、飯と[一字不明、菜?]のみなりと。幸ひなるかな、我が舎受験生よ!!(菅)

三月九日(火) 朝登校する時可成寒かったが、昼頃は天気が良くなり、冬オーバーを着て歩く背に陽光がぼかぼか暖い。道路に積ってゐる雪も陽当りのいゝ方だけが早く溶け出し、斜面を形成して大変歩き難い。昼休み校庭には受験生の群がうようよしてた。春に背く彼等が、未だ溶けやらぬ雪の上にマントをしいて、各々持参の弁当や握飯にかじりついてる姿は、深刻なものだ。我が舎の受験生は何うした事だらうと思った。夜第一日目の筆記試験が終って気が軽くなったのか大分騒いでゐる。未だ子供の彼等の事、試験のある舎生諸兄、もう一日だ、我慢して呉れ。(三宅)

三月十日(水) 戦下の陸軍記念日、朝から防空演習。話に聞けば飲食店は休業だそう。だが、小生等、試験勉強の真最中の者に何の影響のあらうぞ!宿屋とか下宿では、朝の副食物は漬物丈、晩は味噌汁丈だとの事。目下栄養不足を唱へてゐる矢先にこの様な粗食をとってゐたら、日本国民の体位もますます低下することだらう。国民の緊張をこんな風な「行」めいた事で増すのも、亦迷惑な話だ。勿論三日間で飢餓になることもなからうが。日本が発展するには、国民の体質が良くなければならない。国民が全部健康であつたら国の発展性は増す訳である。現在の時局は、女、子供はともかく、吾々学生は

勿論、あらゆる階級、職業の人のすべてに大きな荷重を加へすぎてゐる。亦そうでなければ、立つて行けないのであるが、かくして、日本人の体力が衰へ、その上、二次、三次と荷重が加へられたならば、日本は一体どんな風に変つて行くことだらうか。力無き国と化すかも知れないではないか。国家が国民の健康をも考へずに居たならば、それは大きな誤りである。かと言って、札幌市が市民の体育をゆるがせにしてもならない筈である。此所に於て、札幌市の配給品の少なく、且バター等を病人に丈やるのが、妙な気がする。転ばぬ先の杖である。受験に未だ、帯広中学の連中が、入学するかしないか知らないが、試験をすませて帰るといふので、赤飯を以つて会食する。副舎長は、かゝる赤飯を喰ふのを、歓迎会と掲示してゐたからは、亦大分さゝやかな歓迎会だった、と言つても、亦差支あるまい。寿君、三村君、何時になったら巢に帰るのかな。（望月）

三月十一日 春らしい暖気を吹き飛ばす風雪が朝から吹く。四人の受験生も昨日で試験が終つて映画にでも出かけたのか静かな舎に実科三勇士籠城。増原さんから江別の牧場で愉快地皺伸しをしてゐるとの消息あり。明日に控へる試験の苦しみを一層増す。暖かい春の訪れと共に敵機襲来を覚悟せねばならぬ。吾々国民として、希望に満ちた新しい気持で新学期を迎へると共この心構を堅くしなければならぬと思ふ。試験で疲れた頭の中に、若草の上に転がって読書に耽る北野君の姿が浮ぶ。（佐本記）

実科の試験始まる。中村、佐本両君、満点の成績で満足の様子が現はれてゐる。小生はどうやら、コンデを免れてホットした。明日は、最も嫌な土壤の試験だ。頑張る積りである。乾パン、特別な方法で手に入れた乾パンの配給、特別室より。（内田記）

三月十二日 夜七時で帰舎す。汽車から降りて、十日前に感じたと同じ札幌の町の感じをひしひしと感じた。十日とハ云へ何だか随分永い間経つた様な感じがして、町が變つてゐるのを予期してゐた自分の予想を全く背かれてゐた。静岡を出る時ハ、永い旅ヤ、雪に閉された札幌を思つて、つくづく厭になつたが、兎に角汽車に乗つてしまへば、一日たつと厭なしに札幌返つて来られる。札幌の土を踏むと同時に今迄の旅ハすっかり過去のものとなつて終つて、現在の自分ハ、どこ迄〔意味不明〕の札幌の土の上にあると云ふ現実が、不動のものとなつてしまった。北極星ハ、静岡のものよりもずっと〔一字不明〕いし、空気ハづつと冷え冷えする。幼い時読んだ物語の魔法の杖で一瞬の中に、千里の道を飛び越えた様な感じである。

三月十三日 菅沼、三宅、太田の諸兄と小生と四人で宮部先生のお宅に伺つた。先生今宵ハいつになく御機嫌で、お話がハづまれる。植物の事で花が咲く。帰舎したら、間もなく飯島さんが帰札された。昨日、トランクがチッキで届いたので、今晚あたり帰つて来るな、と心待ちしてゐたのだ。林檎を御馳走になつた。

三月十四日 ひるから太田さんと、三越の展覧会を見に行つた。帰へりに写真屋に行つて、一枚取つて来た。晩のエッセンハ太田君と一緒に御馳走を喰べた。九時に帰省される由うかゞつて、飯島さんと小生とで、苗穂から札幌迄御送りした。

三月十五日 朝飯島さんと学校に行く。飯島さん十月以来始めて出席した講義、今日ハ相

にく、休講。ひるから、風呂に行つて、帰つて来たら、もう三時半。内田君、部屋に来て、例〔◎付き〕の物語りに夕飯迄熱を上げる。夜ハ暖いストーブの傍でコックリコックリ。

三月十六日 今日ハ工学部の防空演習である。おかげで、三時限がつぶれた。午後エントツのオソウジ、まっくろになつたので、風呂に行く。帰へりに米を取つて来る。舎の台所の前の真黒な水槽がひっくりかへつて、全身泥水にまみれてしまった。

◎特種。本日、某氏の所へ、いと、みめうるはしきお方、御訪問す。我々、心臓の痛み能耐えかねて、悶々の一夜を過せり。

(追記) うるはしきお方二十一時お帰りあそばし、我等一同某氏に招待され、おみやげのリングジャムを御馳走になり、さきほどはこのジャムにも優りて甘からむと思へり。

(補記) 三宅さん夜見学旅行に出発される。

三月十七日 雪どけの道は歩きにくい。夜某氏を札幌駅に送る。送る人三村余輩といつてうるはしきお方の諸氏なり。某氏を送りて送りし人々は星のかすみ、春近き生暖かき夜を同じかたへ足を向けり…ロマンチックの人々、ロマンチックの夜に、ロマンチックの話に耽らざらめや。

三月十八日 実科の試験本日で終る。内田君、誤つて三村君に牛乳飲まれ、その夜部屋に来て、

内「僕誰かに牛乳飲まれてしまひましたよ」三「俺だよ、すまん」

内「僕ね、誰か外から人が入つて来て飲んで行つたのぢやないかと思ひましてね」

三「いや、すまんすまん」

内「いや、いゝですよ、実はね僕も三村さんに飲んでほしいと思つて居たんですよ」

三「ウエ……」

三月十九日 今夜、賄の後任を志望される人来られ、来て戴くことにする。御主人は道庁に務めて居られたが、昨年不幸、十勝で列車事故で亡くなられ未亡人で、今は専ら子供の教育に力を注いで居られるので「孟母三遷」の故事の如く、寄宿舍は子供の教育に好感化を与へるものと信じて舎に来られることを熱望して居られる人である。政司さん本日で試験終り、夜南へ飛ぶ。

三月二十日 本日より三日間防空演習。敵機必来が叫ばれ、演習も段々真剣味を加へる。学校でも午後から組織的な演習が行はれ、各自鉄帽又は布団等を持って出掛ける。予科の入学試験合格者の発表がある。増原君本日野幌牧場のアルバイトから帰る。相当腕力が鍛へられたとのこと。卓ちゃんも、佐本君も試験が終つてから昼は毎日姿が見えない。毎日何処迄行くのやら。やよ飛べよ、飛べ々々春の来る方へ。

三月二十一日 晴 昼、佐本君帰省。夜、土居君、弟君受験の為、帰舎。午後八時三十分訓練空襲警報発令。拓生、清、卓三、壽の諸君、時を移さず舎警護の位置に付く。十時近く敵機盲爆(?) 焼夷弾は舎物置小屋に命中、清君「焼夷弾落下!!」の警報に我々直ちに現場に急行、隣組の応援を得て見事(?) 消火成功。十時空襲警報解除になる。執拗



な敵機は午後十三時、再度来襲せるも、今度は我が舎生の活躍実に目覚しく東西に長駆し、率先適切な処理を施し、大いに隣組の為に尽して、たのもしがられ(?)、就中卓三君の梯子登りは正に神技とも称すべきである。御大、御安心あれ、舎の護りは斯くの如く安全也。内田君、四月より一号室に入る為、今日一号室の掃除をなし、不要の本と思はれるものを古本屋に売る。大部分秤り売りで一貫目二十銭、計六円十銭。(飯島記)

三月二十二日(月) 午前中、六時ヨリ七時二十分迄、防空演習あり。ラヂオのソケット修繕。飯島さん三村さんは登校、中村君図書館。土居君弟の試験の事で、昨晚入札、今朝は朝早くから出掛ける。増原さんと僕は、レコードをヂヤンヂヤンかける。澤井さん、朝舎に荷物を取りに来られる。昼から卵と砂糖の配給を取りに行った。(内田記)

三月二十三日 星野のゲーさんと、畳のことを相談する。仲々無くて、おまけに目だまの飛び出る程、高価だそうである。三宅氏より葉書来る。

三月二十四日 星野のゲーさんの話でハ、畳もゴザも無い相で全く弱ってしまった。内田君、朝から一号室の大掃除。舎の玄関に入ると、クレゾールとフマキラーとノミ取り粉のまぢった、奇妙な臭がする。あれだけまいたら、虱も逃げるだらう。午後川辺氏来る。夜町へ出て、ゴザをさがす。商人ハケチをつけて仲々々物体ぶる。

三月二十五日 賄の小松さんが今日愈々舎を出られることになった。一年のお世話だったが別れの挨拶を交すときにはしんみりと一抹の名残惜しさがある。夜残留舎生で桑島さんを迎へに行く。都合により今夜来られず。

三月二十六日 午後から桑島さん来られる。子供達舎生とすぐ仲良しになる。

× × ×

理論と云ふやつは整然としてあるので一目で讚嘆してしまふ。実際と云ふやつは当然と云ふので一途に独断してしまふ。気力のある青年達は理論をふりかざし、気力を失った老人共は実際にすがりながら進んで行くから困ったものさ。

× × ×

むやみに責任を背(セ)おひたがるものを青年と云ひ、巧に責任をあしらふ者を老人と云ふ。

× × ×

御老人方は雄々しく叫ばれた「新体制精神は先ず第一に実践である」と。そして(珍しくも)高遠なる理念を異口同音に唱へられる。そしての最高精神は、愛の冷却化とエゴイストの増産へと着々実践に移されつゝある。その偉大なる言行一致と実践力には驚異の眼をみはるものがある。

× × ×

今夜は、床の中でしきりに悪魔の囁きが聴へる。

三月二十七日 見た!!見た!!緑の土を。待ちこがれた緑。この気持は、長い冬を雪に閉された北国の人々にのみ真に味へる喜びだ。やがてこの緑は美しく濃くなり柔かな草の褥を我々に提供して呉れるのだ。春は計画と期待の時期(トキ)である、とトルストイは云

ふ。内田君今朝帰省。河瀬君今朝帰舎。今日明日頃から舎生諸君も又段々帰って来て、舎内を賑かすのではないだらうかと待って居る。春は充実の時期であるとトルストイは云はなかっただらうか。（飯島記）

三月二十八日 内田君が居ないので何だか淋しい。三村さん朝から金槌を叩いて二号室に転室作業。昨日帰札した河瀬、岩瀬両君お揃いで朝から姿を見せず、土居君、令弟の一中合格発表を見て、午後二時の汽車で又室蘭へお帰り。合格お芽出度う。午後から中村君も友達と遊びに出て、舎はひっそり閑。眠くなる許り。一人万年床の上に寝そべって本をめくる。

三月二十九日 月曜日 小雪 舎の中は、人数が少ないので非常に静かである。ひっそりとしてゐる。午後少し雪が降った。（河瀬）

三月三十日 火曜日 早朝より吹雪になる。ストーブになきついて太閤記を読みふける。午後新入舎生が来られて室を見て帰られた。

三月三十一日 此の寄宿舍での第一夜を明す。起床八時。初めての食事、味噌汁仲々うまい。朝の間増原さんと色々お話をする。増原さんは大社〔社と読めるが、意味不明〕の人、庭球部であることを知る。十二時、西五丁目助寿司で増原さんと四人前を平げる。僕は丸井へ、増原さんは親類の家へ向ふ。丸井、富貴堂、丸善、五番館で買物、四時帰舎。九番、五番、未完成をきく。レコードが古く聞きにくい。晩飯はライスカレーたら腹食べる。工類二年の石川さんが新しく入舎した。他新丸二人も。二年生河村氏帰って来られた。九時頃在舎の人皆集って新入舎生の為自己紹介が行はれ、お芋のゆがいたのを食べる。就寝十一時。〔欄外に「佐本君も晩に帰られた」〕

四月一日 舎より最初の登校、今迄一里程歩いてみたので大変近く感ずる。予科は新丸を迎へて急に賑かになった。昨年の今頃が思ひ出されて感無量なり。午後買物に出る。街でも至る所で新しい白線が目射る。快晴で雪も大方消えた様だ。夜は方々へ住所変更の報告に過した。（石川）

四月二日 学生にとって四月はめまぐるしい。やれ及落だ引越した。奢れ奢らうで金も忙しい。本日、初めて授業があった。まだ級の顔は皆揃はない。相変らずと言う所。舎に共に起居する人の不幸は吾々も身近に感ずる。三村さんの令兄死去の報に接し、三村さん悲しみの中に急遽帰郷の途につかれた。心中如何。后九時〔二、三字不明、十一分？〕（中村）

四月三日 神武天皇祭。祭日と日曜とがつゞき、学年の始まりなので予習もなく、閑な身体をもてあます。三十六日間の休暇の惰性でどうも頭がはっきりしない。気候も大層暖く、猫は鼠をとる事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。眠たい春の前兆か、どうも眠たい。退屈なので街へ出ると、白線あざやかな新丸がもっともらしい顔をして歩いてゐる。昨年四月の自分達を思ひ出すとうたゝ感慨一しほである。どんよりした天気である。これを鯁曇といふならん。外では除雪作業のシャベルの音がやかましい。寄宿舍は

北野、土居…等の中堅的メンバーがみないので淋しい。 河村記

四月四日 「四が重なるからと云って縁起をかつぐな」と何だか新聞で読んだやうな気がする。でも街行く人にはそんな事すら考へる暇のない忙しい顔付が多い。北大に入ってから最初の日曜。「よし、新丸笑ってみろ」とこきたない上級生がドナルドで道行く人の一斉注目を浴びて赤くなったり黒くなったり。一日中暗雲低迷。鬱然として気が晴れない。窓下の雪は雨に姿をとゞめず、じっと永い冬を過した草の葉が黄ばんで、延びやうとする逞しい生活力があたりに感ぜられる。昼食には快活な北野さんも加はって愉快だった。静かだけれども、新学年〔1字不明〕を迎へて皆の意気は向学に赤熱してゐる。夕食後は残ったのは僕だけに、一人か二人で皆入浴に行った。昨夜は我等新入生のための？ストームを盛大にやってくれたが、コウフンしたので眠られず、どうもまぶたが重い。ストーブの音は穏かに部屋の空気を暖めてゐる。明日も曇りかなあ。  
(山本記)

四月五日 昨夜警戒警報が発令されて未だ解除にならない。春の訪れと共に空襲がやかましく伝へられ、現下の非常時局が強く心を打つ。帰舎後舎に於て防空準備を完備するため色々の準備が行はれた。戸外は一点の光さへもれぬ暗黒の世界である。(岩瀬)

四月六日 晴 警戒警報未だ解除とならざるも、皆悠々として一度位空襲を経験して見たい様な様子。夕食後、土井君の母堂より贈られた五円にて、皆でそば屋へ出張したが、会憎「本日休業」。そこで帰るのも残念と、おかめへ入る。帰って一同皆一号室に会し、親睦会を開く。十一時頃解散。円かなる夢路につく。 河瀬

四月七日 風邪を引くと身も心も重くなる。夜は遮光された窓の外でアラレまじりの風を強く吹きつけ益々気は沈む。夜三宅さん東京方面の旅行を終り一旦帯広へ帰る途中舎に寄り一夜を過す。山根中尉殿其の後にも元気に軍務に御精励とのこと。東京の土産話を聞く。

四月八日 新学年最初の大詔奉載日、中村君にさそはれて佐本、増原さん達と早朝札幌神社に詣でる。八月には魔の踏切にて応召の入江先生を送った。夕食には待望の初鯨を食ふ、うまかりき。 石川

四月九日(金) 昨夜は望月さんと内田君帰舎された。四日発令に与り五日全市を暗くした警戒警報も午後四時解除となった。太田兄は全国漫遊記に休止符を打って帰舎された。あちこちの室で土産話に花を咲かせてゐる。今晚から又せいせいした気持で眠れる、街は明るい。

四月十日(土) 今朝は寝坊が意外に多かった。遮光紙を取ったのだから夜が明けたのを知らなかったとは言はせませんよ。昨夜騒いだり駄弁った祟りならん。さう云ふ吾も怪しいものなり。朝食も食わずに飛んで行ったのは誰ぞ。

四月十一日(日) 曇 朝からどんよりとした天気である。山岳班の新丸等と昼から藻岩へ出かける。下りは相当にゾンメルが飛んだ。舎にも四人の新人を迎へた。兎もすれば沈滞し勝ちな舎内の空気を積極的に盛り立てて行かれることを期待する。帰札してから一

週間夢の様に過ぎ去ってしまった。副舎長菅沼アブチャンは未だ帰舎しない。宮川カン子さんの所に楽しき夢を結んで居るのなら無理もない。舎の蓄音機がこわれてしまった。あんなものでもいざないとなると淋しい。文芸部で何とかして下さい。楓林、その音合併号も未だ出来ないらしい。長く前から続いて来たものなら僕達もその鎖の一つを欠かしたくないものだと思ふ。 (大泉)

四月十二日 (月) 曇 昨日の疲のためか、相当おそく起きた。今日も又嫌な天気である。飯も充分咽喉も通らず、あわて登校した。学校も良いかげん嫌になって、昼食だけが待遠しかった。友達が来札したので駅へ出たが、その帰り、久し振りで「シンマル」とどなられて気持が良かった。やはり新入生だなと自分で感ずる。家より荷物来たが開けてがっかり、何もなかった。つまらない。七時より会合、諸部の委員、顧問の臨時設定が行はれた。八時過散会した。舎の人も殆ど顔も分った事だし、今日の会合は気が落付いてみた。まあ、そのうちに舎の内容が分ったら大いにやろう。 (野尻記)

四月十三日 (火) だんだん舎生諸兄の顔もそろひ、賑やかになってきた。今晚は三村さんが帰舎された。三宅君帰舎。頬をなぜる風も春の匂ひをたゞよはせ、植物園の春も間近であらう。 河村記

四月十四日 (水) 今日は又雪にあられで如何にも北海道らしい感じがします。初めて来たときは郷愁が四月のみぞれと共に迫って唯々情なく思った様な今日の様な日が一年経った今日此の頃ではかへって何か思索するのにふさはしい哲学的雰囲気を秘そめる背景として感ぜられる様に成ったのです。新入生も大分馴れた様です。勉強に読書に出発〔一字不明、道?〕しっかりやって下さい。何かしら私にも新しい分野が拓けた様な気がします。有意義なダベリの集ひの欲しい夜です。思ひ出した様に又アラレが窓を打ちます。私の親しい人も今、此の空間にどうしてあるでせう。久し振りにロマンチックな気分になりました。 北野書

四月十五日 (木) 秋葉君帰らる。毎朝運動部主催で舎の外側の清掃が今日から部屋毎に行はれる。我等の寄宿舍は我等の手で、良くなるのも悪くなるのもきれいになるのも汚くなるのも皆我々の責任である。実践の尊ばれてゐる現代運動部のこのもよほしは美しい。愛舎精神は実践より生れる。各部の陣様も大体定ったのであるから、今後活発なる活動が展開されることを希望する。

四月十六日 (金) 小生徴兵検査のため一日、レントゲン、たはらかつぎ、教育調査等を受けてくる。

四月十七日 (土) 小生徴兵検査。午前七時より二十二時三十分迄十五時間三十分の間市役所にとちこめらる。今日程肉体の尊厳さと体力の養成の大切なることを痛感したことは少い。菅沼君帰舎さる。 渡辺

四月十八日 (日) 昨夜帰舎す。一ヶ月振りに見る舎生諸兄の顔、新しい気分で大いに勉学中、遅れて来た為か気が引けるやうだ。土井、北野、河村君等、ハイキングに出かけた。毎日の鯁で、舎生も…だろーが、栄養価満点だ。今夜、舎生と色々と舎の事に就い

て相談す。 菅沼

四月十九日（月）晴 春風のほのかに入る室で、春眠不覚暁と大ブタ寝、有志の朝のアルバイトの物音に驚き目覚む。舎生皆早起となりたることは事実である。夜、菅沼、三宅、渡辺、太田、増原の諸氏、宮部先生宅訪問。先生の温顔を拝しうれしかった。おぼろ月夜である。春宵、舎生の夕べに声〔一字不明〕なり。 （太田記）

四月二十日（火）晴 今日も暖い。日中道路を歩いてみると汗ばむ。が吹きまくる馬糞風は不愉快だ。舎生各位、運動部主任の熱心な働きで舎の外が綺麗になった。舎の内も賄の小母さんの努力に依り、古めかしく輝き、伝統を誇る様に黒く光ってゐる。外観と共に精神的にも良きものになる様努力せねばならぬ。夕方になるにつれ天候悪くなる。 （三宅）

四月二十一日（水）曇後雨寒し。夜決算、食費一日五十銭未満〔二、三字不明〕安。毎日鯁の〔二、三字不明〕。今日から又一年分の〔一字不明、小？〕新炭を予定を定めてとり始める。決算後さらしあんにでんぷん〔三、四字不明〕の代用するこの馳走あり。〔三、四字不明〕来る二十四、二十五日の薄別旅行の相談あり。もう幾夜寝たら良いのか待遠しい。入舎以来四回目かの薄別なれど、新入舎当時、あの薄別の冷泉につかつて先輩達と寮歌をどなったり、徹宵余興やストームをして騒いだが、〔昔？〕が忘れられぬ。昨年家も新しくなり経営者も変った〔三字不明〕、その昔の如く静かにして古めかしい温泉であれば良いのだが。 （三宅）

四月二十二日（木） 草木の萌え出すと共に新入生を迎へて御老体の寄宿舎も活気付いて来た。朝早となったのもその一つ。朝のアルバイトも興かって力あり？皆んな進んで舎の清掃に喜んで当って呉れて有難く思ひます。行き届かぬ所は皆で特に指導部の人は気を付けて注意して戴き度い。徴兵検査を受けられた渡辺さんの言葉にもありましたやふに体力を練らなければならぬことは吾々は百も承知しながら遂おろそかに成勝です。つまらぬことでも手近な所から体を動かすやうにしたいと思ひます。今日も甘い甘い生菓子の配給あり。 （佐本記）

四月二十三日 ととてもいい天気、風が少し強い。風が吹く中で全生徒必修体操が行はれ帰舎が少し遅くなる。明日、明後日を利用して薄別旅行が行はれるので皆準備をする。小生、病後の為断念せざるを得ないのは、至極残念である。

四月二十四日（土） 靖国神社臨時大祭。舎生九時頃、薄別旅行の途に就く。太田、内田、中村、大泉、岩瀬諸氏と舎に残る。朝の間護国神社に参拝し中島公園を散歩。夜は内田大人より朝鮮のお話を聴く。

四月二十五日（日曜） 薄別旅行。昨夜、宿でゼスチャー、銭廻しに打興じて、寝に就いたのは十二時過ぎ。消灯後、菅沼副舎長の？談を期待してゐたるも肩が痛くて？談どころではないとか、残念ながら後日に譲って行儀よく寝る。八時過ぎ全員起床。朝風呂に入って、朝の味噌汁をたらふく飲み、大きなお櫃を二つ空けた。食後は中食のむすびを作ってくれる迄、碁をして遊ぶ者あり、橋の上より早春の溪流を眺めて徘徊する詩人あ

り、再び寝台に潜り込んで昼寝する怠け者等…。十時過ぎ宿屋を出発、「サイナラサイナラ」と云ふ、デッパのおかみさん、水膨れの娘に送られて、…「サイナラ…又来年！」…かくて溶けつゝある雪路をベーやベーや歩いて定山溪へ降りて行き、十二時頃定山溪駅へ到着。駅裏の空地で、温泉宿の薨を見下ろして、むすびと焼鯿でむしあむしあ。十二時四十分の電車で帰札の途につく。秋葉、佐本両兄は、一汽車遅れて、錦橋あたり迄かお歩きになり、他の者は〔二字不明〕席を取って帰る。宿のおかみさん同じ電車で札幌へお出掛とかで、望月さんと話はずんでみた様子一。途中、望月、三村、北野の諸兄、市立〔一字不明、腸？脳？〕病院へ見学に行くべく下車、残りの連中も三々伍々夫々帰舎す。渡部、菅沼、三宅、秋葉の諸兄にとっては最後の旅行一。又新入の舎生諸兄にとっては初めての旅行。夫々に楽しい思い出となることでせう。こうして打揃って一緒に歩き、だべり、食い且つ楽しむことが出来るのも寄宿舍ならではです。どうかこの愉快的な旅行を契機として舎生一同の生活に潤が増し、カメラードの生活に入って行きたいものです。尚、食事部の仕事怠〔一字不明〕のため皆さんに迷惑、手数をかけて相済みませんでした。平に御容赦を… (増原記)

四月二十六日（月） 二日間の休続きに骨休めをして、さて学校となると、筋肉の活動がどうも不如意である。天気は素晴らしく良い。水仙が咲いてゐる。少女の希望の様にふくらんだ木の芽が暖かさうである。今日は珍しく爆音が耳に入らぬ。猫も終日丸く寝る今日此頃、何で眠らずにおらりょうか。学園の芝生が揃って新鮮な緑を浮ばせる。学校生活にもちよっぴり手垢が着いて、面白味がほんのりと匂ふ。マント姿もぐっと減った。素足草履の中に決戦の息吹が漂ふ。夕食は都合で遅かったが鯿は上味、皆夕食が済むと消えて仕舞った。さては「大〔一字は名？か各？〕家」かな。たかれば良かったと思ったが、さて、二日間に溜めた勉強が恐ろしい顔付をしてゐるので、そはそはと机に向つた。何時もの長い汽笛が植物園の森に呀え、物凄いな音。そして其の後の静粛、夜は深い。  
(山本記)

四月二十七日（火） 今日も又一日晴天。朝の気分は何んとも云へない良いものです。次第に札幌の町が活動しはじめるのがわかります。夜は又コンコンと楽しそうなピンポンの音がして来る。  
(土居)

四月二十八日（水） 予科は全校体操が行はれた。緑の野に出て思ふ存分四肢を伸ばし腹をへらして帰る。久し振りで鯿と縁を切り、御馳走に舌鼓を打つ。明日は天長節なので夕食後映画へ行く者多く舎内静かなり。  
(岩瀬)

四月二十九日（木） 晴たり曇たり 九時より中央講堂で挙行された拝賀式に出席、学生生徒で一杯だった。十時頃、味噌、醤油の配給を受取りに、菅沼、北野、川村、大泉、岩瀬、内田、熊谷の諸氏と一緒に出かけましたが、天長節の観兵式のため、市役所前の参道で通行止めに遭ひ、漸くのことで遠回りをして配給店へ到着したら、何と今日は臨時休業の掲示が出て居て、一同失望落胆すること甚しく、持参せる樽も捨てて帰りたい位だった。予科生の一部は何処ともなく映画館へ雲隠れして、菅沼君が一人でリュックサック

を四つ程肩にかけて帰られたとの事、さてもさても、いみじきことなる哉。帰りに元の道を通って市役所の前へ来たら、丁度、女学生群が分列行進をやって居て、観集が前へ前へと押出して、警官達が制圧するのに大事であったが、その後から馬の分列行進が来て、腹をこはしたらしい馬が路上へものしたところが、観集は皆あとじさりして、警官たちもほっとした様子だった。此の頃、夕食後、舎内は大分静かだ。遠からず、伊藤さんのところの池の蛙が春の音楽を奏でてくれる季節となることだらう。

(秋葉)

四月三十日 昨日迄、良い天気がつづいたが今日は雨。夕食後、馬鈴薯が出る。外に変わりたることもなし 河瀬

[寄宿舎日記・昭18・5]

五月一日 土曜日 昨日の雨も今日はすっかり晴れて、本当に五月の春らしい空模様。自分は今日、医化学教室の連中に仲間入りをして、薄別温泉に一泊旅行をする。まだ道路には雪が解けずにゐた。道端には延齡草や名も知らぬ紫の花が咲いてゐた。暫しアルプスの近くの山小屋に行く気持がした。舎生諸兄の生活状況は知らず。

五月二日 日曜 晴天 植物園の木々にも淡黄緑の芽を吹き出して、美しくなつて来た。LIEBER MAIといふ所でせう。鈴蘭も店頭には現はれることもアカシアの花、リラの花の咲くのも間近だらう。

五月三日 月曜日 天気は幾分低気圧である。朝から雨がしょぼしょぼ降って来たりした。春雨なんだらうか。故郷の静岡の雨より、札幌の雨は執拗ではない。鬱陶しいより寒々しい。

五月四日(火) 今日も小雨が降って、感じの悪い日だった。気持のさっぱりしない時は、何もやりたくない。落着かない。何をやっても面白くない。

五月五日(水) 端午の節句。部屋の窓からも鯉登りが一りゅう〔竹冠に流〕五月の空を泳いでゐる。夜はお祝ひに五目飯が出た。志るこも出た。今夜は暖かく窓を開けて勉強する。予科生が食堂に集つて寮歌を歌つて居る。間もなく雨が降り出した。菅沼健三氏、本日徴兵検査の結果第一乙種合格。 飯島

五月六日(木) 桜の花が綻び始めた。エルムの芽が膨らむ。春だ春だ。此の頃皆公区の体操に朝六時出席して居る。春と共に舎の新体制が来た。実に和かな風が吹く。(中村)

五月七日(金) 爽やかな五月の朝風を胸一杯吸つて朝のラヂオ体操!!今更その効能を述べる必要もないと思ひます。舎生挙つて舎の前でやられたらとは愚生の希であります。近時テニスコートに球の音絶え間なき、又悦ばしいことではある。夕食久し振りに又も鯉にお目にかゝる。 石川

五月八日(土) 大詔奉載日。今日も又うっとほしい天気である。朝目が覚めて太陽の光が見えぬ時は〔二字不明〕がっかりする。だが朝のラヂオ体操はいつでも気分の良いものだ。春ともなれば春眠暁を覚えずと言ふが、これは昼迄延長される。時間中は実に眠

い。午後中央講堂で研修会があるのをサボって、二時より作業。見事な成果に今迄のみじめな畠が見違へられる。今年の豊作を期待して止まん。エッセン、これ久し振りにおいしい。この様な作業なら何時でもするが、たゞ畠作に関し、更に常識を働かして、昨年中、堆肥を作って置くとか、収穫後、畠を起すとかする方が実際的に良いと思ふ。一日中寒くて、全く嫌だった。明日の日曜、晴天を期待して。 野尻

五月九日 昨晚、牧笛の原稿を書いて遅く就寝した。今朝、眠り醒むる頃、キーッと戸が明いて、電燈がパツとついた。今時分誰であらうと、半バ夢、半バ現実の間にさまよひ乍ら、おぼろげなる姿を見れば、何と、大久保彦左エ門氏である。やがてブツブツと語り声、しばし桃源の夢国はありし余ハ、仙人のまじなひかと不思議に思って耳をそば立つれば、どうも浮世の音がする。仙人ハ霞を食ふとか言うが、声の主ハ何やらムシヤムシヤと食ふて居る様子。霞を食ふてもかやうな音ハせぬ。一やゝあつて余ハやうやく現実の世界にひきずり下ろされた。一声の主ハマぎれも無き人間である。而も向ふ隣の住人一余辟易として楽まず、すぐ目前にある宝玉を、〔一字不明〕将に届かんとして達せざる気持なり。彼人、とうとうとして弁じ、綿々として訴へ、嘆くが如く、笑ふが如くして休まず、延々一時間に渡りて語る一晝の眠ハ浅い。而も一度目覚むれば仲々眠れないのが、晝の頃である。余ようやく五里霧中に入るも、又忽にして人の音がする。覚むれば即、ラヂオ体操に行かんとして、友の我を起せるなり、嗚呼。ひるから畠をアルバイトする者あり、〔二字不明〕に火花を散らすものあり、アルバイト終りて、ジャガ芋を喰ふ。夜のエッセンハシチューウ。

五月十日 今日は曇つてみて仲々くらい。そのわけであらう公区のラヂオ体操に出た人は僅か四人を数えたのみであった。花曇りといふには寒すぎる。でも桜は今は満開、学校へ行く通路の紅梅も見事に咲きそろつた。午後から雨が降って寒々しい。

五月十一日 相変わらず寒くてがっかりする。桜も梅も咲いたのにどうしてこう寒いのだらう。今日医学部の解剖を見学に行ったが、ホルマリンの臭気が鼻につき、気持が悪くて仕方がない。

五月十二日 相変わらず寒い。テニス、キャッチボールもこの処はやらない。夕食後、警戒警報が発令され、大急ぎで遮光紙を下ろす。枕下にゲートルを置き、一脈の緊張がたゞよふ。

五月十三日 午後七時頃五番館裏手より発火、折柄の風にあふられ火勢ますます強く、夕暮の薄暗に真赤に映え、その壯観いはんかたなし。舎生有志、直にしつぽのない野次馬となり現場にかけつけたが、ますます延焼、その色が丸善やグランドホテルのビルに真赤にうつり悽愴、本物の空襲もかくやと思はる。すぐお隣の大谷家、火の粉をあび煙につままれ将にピンチ、将に悲愴。見物せし御〔一字不明〕連の感慨や如何に…八時三十分漸く鎮火。本日のいろはにおける新入生歓迎会、警報中につき延期せり。

五月十四日 警報いまだ解除にならず、舎は洞窟の如く暗く、小雨そぼふり、風うす寒く、五月の空のメランコリー。同室のY・K氏、七時といふのに白河夜船…日頃寅彦を崇拜



する彼、寅彦は六時半から寝たかしら。

五月十五日（土曜） アッツ島に米軍上陸す。かの島にて勇戦する勇士を思ひ、毒ガスを使ひし米軍の非道振りに憤慨する。三吉神社のお祭りで、四五名打ちそろってお参りする。

五月十六日（日） 日記を停滞してすまぬ。十九日に検査があるので各部屋大掃除をする。蓄音機屋がゼンマイをインチキしたので大挙しておしかけ直させる。すっかり観念してすぐ取かへてくれたのにはいさゝか評子ぬけがした。

五月十七日（月） 警報やっと解除になる。ゲートルなどまいてみると気がおちつかなく、解除になってほっとする。夜鉄北のごちさうあり。予科実科の諸君のミーティングあり、近頃は季節はづれに寒い。榆の若芽ももえ出し、桜も散り、愈、初夏に入らうといふ時にどうしたものか、諸君に朝のラヂオ体操をお進めする。朝のわづかな時間で一日の肉体的精神的調子のトレーニングするのは非常に効果があるものですよ。

五月十八日（火） 昨夜カラ佐本君、農学部ニ宿泊ニ行ク、明日マデトカ。昨日ノ予科・実科ノデスクッション、コレラ持ツテ更ニヨリヨキ舎生活ヲ意義アラシメタリ。太田君今夜ヨリ旅行。

五月十九日（水） 本日突然、熊谷君退舎サル。薪三百二十束買フ。コレデ、今年一冬カラ来春ニカケテハ、前車ノ轍ヲフムコトハナカロウ。衛生検査、四十年来ノ歴史ヲ破ツテ始メテ不合格!!（アノヨーナ大掃除ヲ充分ニヤツテノ不合格ハ始メテダ。モットモ、ヤラナイデ不合格ノ事ハチョイチョイアルガ。然シ、コレハ内緒ダヨー）。太田君ノヨウニ自由ナ詩的ナ（？）生活ノ出来ル人ハ羨シイ。大泉退舎。 菅沼

五月二十日（木） 曇天、寒い日が続く。夜七時より五月総決算。オバサン及食事部長増原氏の献身的努力あって、今月も味噌三樽他ストック品購入ありしにも拘らず、一日食費五十銭にて済み、「[新入生歓迎会]」の付箋に隠れ、四、五字不明]五円を納めても二十八円余なのは感謝に堪へぬ。決算終つても食ふ。 (三宅)

五月二十一日（金） 新入生歓迎会が「いろは」で壮んに行はれた。宮部先生は体の都合で御出席出来ないそうで淋しいけれども舎生だけでするやうになったと副舎長から説明があった。新入生、山本、野尻君大いに頑張つて呉れ。新入の感激を何時迄も忘れないで男らしく初念を通して努力して欲しい。もう中学生ではないのだ。胸に手を当てゝよく考へて見て下さい。きっと行くべき道、使命がはっきりと浮ぶと思ふ。静かに考へて欲しい。熊谷君退舎に関し、萩原先生副舎長の所へ来て、あやまつて行つたそうである。

[一字不明、太?] 田さん未だ姿を見せない、どこにどうしてゐるのやら。山本連合艦隊司令長官の戦死の報伝り、舎生一同食堂で元帥在りし日の姿を偲びつゝ散華を惜んだ。木の芽梢、緑萌んとする頃。 (佐本記)

五月二十二日（土曜日） 今日には青少年に取つては永久に記念さるべき御親[一字不明、湯?賜?] 記念日である。朝九時より北大全部工学部裏ローンに集つて、「青少年学徒に賜りたる勅語」捧読式、閲兵分列あり。折から曇つてゐた空より、雨のばらつく中を、

行事を進行し、十時半頃閉式、後はフライになる。舎生それぞれ配給受取りに行かれ、夕食は牛肉、馬肉のすき焼き。菓子の配給もあり。新聞は山本五十六大将のニュースで埋められ、故元帥への哀悼の言葉が誰もの口から出る。自分も心から元帥の御冥福をお祈りする。夜八時からの徳富蘇峰氏の元帥を偲びての講演には感激した。元帥の人格と共に、蘇峰氏の愛国の熱情がほとぼしり出て、日本強しの感を深くさせた。若き日本の学徒お互いに頑張らう。 増原

五月二十三日（日曜） 「快的」今日の第一声は幸福に満ちてゐた。メランコリーの鬱積してゐた札幌の街が素晴らしい陽気。ぐっと塗られた緑の感触が「初夏」といふ涼々しさと若さを発散する。寄宿舍の大掃除も終わった模様。俺は特別免除の形でアルバイトに従事しなかった。働く事は人一倍好きなんで、大いにやりたかったが？一日中街の中を飛んで廻って、得たものは疲労だけ。ほんのりと楽しかったなあと思はぬでもないが。「私的生活に終始した」って感じ。寄宿舍の飯の匂ひが懐かしく腹にしみる。玄関前で副舎長さんが記念の撮影に汗だく、腕前はどうか、よくは知らない。舎内に空虚が漂ってゐる。俺一人の気持だらうか。自然界は斯かる人間俗界に無干渉に逞ましい息吹をしてゐる。 山本

五月二十四日 一日中天気よし。本日より舎内改革さる。七時十五分蓄音機を七号室前に持ち出してラヂオ体操を行ふ。老境に入りたる為廻転速度たどたどし。夜回覧板来る。その中に『七時十五分ニ遅刻セシ者ニ対シテハ五銭、欠席シタ者ニハ十銭ノ課税ヲナス。』と。〔欄外に寄宿舍らしき建物を背景にしたラヂオ体操の写真添付〕

五月二十五日 今後ガス使用に際し十分儉約する様注意があつた。夜理事会の為副舎長殿、舎長先生の宅を訪問する。アツツ島方面の戦況が発表さる。戦艦一隻、巡洋艦一隻大破の大勝を得、北に住む我意を強うす。明日は新入生歓迎会なり。晴天になるらしい。 岩瀬

五月二十六日（水）小雨 七時十五分より十五分間程ラヂオ体操を行ふ。予科生徒は新入生歓迎会とかで、中島公園より真駒内迄行軍したとのこと、小雨が降ったり止んだりで生憎なお天気だ。六時より中央講堂にて、学術講演があり、舎生は大部分聴講に出かけた。夕方乾パン二袋宛配給あり。七時のニュースにて、帝国海軍の赫々たる戦果が発表された。増原君は都合により、本日より外泊することになった。 （秋葉）

五月二十七日 晴天 近頃は、毎朝ラヂオ体操があるので、朝寝坊の我輩には一寸つらいが、然し、寝坊しすぎてあわてる心配がないから有難い。海軍記念日なれど、特別に行事もなし。舎内変りたることもなし。 （河瀬記）

五月二十八日 快晴の五月日和。澄みきった空と真昼の日にきらぎらと輝く若葉の緑。毎年見る景色ではあるが、又心を暖めて呉れる新鮮な美しさである。植物園は殊の外に美しい。晩は、寄宿舍に居た者は少かつた。「海行かば」を見に行つた者もあれば、天婦羅を食に行つた者もある。

五月二十九日 朝から快晴の良い天気であつた。授業は午前中なので、午後から植物園に

行った。今日は何だか落ち着ける様な気がした。

五月三十日 十七時のニュースで、大本営発表、アッツ島の我守備部隊玉砕、全滅!! 壮烈無比、皇軍の神髓世界に顕示した。傷病兵は悉く自決し最後の猛突撃を敢行したあゝ神兵、山崎部隊、我が守備部隊は二千数百名にして、敵は特種優秀装備の約二万、五月二十八日迄に興へたる損害六千を下らずと云はれる。此の日、谷萩報道部長は、十九時より、「アッツ島血戦について」と題し、放送を行った。「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ。」と従容として悠久の大義について護国の魂魄と化し、日本精神の極を遺憾なく発揮した。其の最後は、全員皇居遥拝、莞爾として死地に赴く、これは大楠公の湊川における戦闘を彷彿させるものがあると思ひます。かういふ惨澹悲壮なる状況下にあり、その烈々の意気、必死の覚悟には誰しも感佩して「陸の佐久間機長」と云ふ感じが致します。その綽々たる余裕にいたっては、既に生死を超越した聖人の面影すら認められるのであります。嗚に何たる崇厳な、何たる壮挙でありませう。最後の攻撃決行前に、大元帥陛下の万歳を奉唱し、神国日本の天壤無窮と、大東亜戦争の必勝とを、そして後に続くものを心残りなく笑って大義についたのでありませう。私は謹みて合掌して、此の筆を置きます。

五月三十一日 十九時より、舎の事に就いて、特別室で会を開いた。舎の小母さんの事で舎生に意見のある人も多かったが、大体話はまとまった様である。夕食後、飯島さん、望月さん、太田さん、三村さん、河瀬君、北野君、土居君、河村君の八人の方は剣道をされた。皆元気にハリキッて、頑張っておられたが、中でも、剣道初段の飯島さんの腕は、特に目立って冴へておられると云ふ感じがした。他の方々も、一級、二級の自信のある強い人々ばかりで、活気が満ち満ちてゐて、見てみて感じが大変に良かった。

六月一日（火） 最高気温二五度三十分。水無月。内地では水田の灌水で水も足りなくなる頃、もう蒸暑い事と思はれる。此の札幌にあつてさへ、六月の声を聞いたら急に暖くなった様だ。更衣の日である。警官の黒服も白に変わって「シラサギ」となる筈。掏摸、穴巢狙ひの輩よ、言の間違いてへマをせぬ様したらよからう。此の頃から夕方が気持よい時刻になる。涼風に頬をあて着流しのポプラ並木の散歩もよくなる事だらう。

（中村）

六月二日（水）快晴 最低気温十八度半C 朝から雲一つない天気、真夏の様な暑さである。小川のほとりの芝生には半袖のmadchenが現はれた。放課後の修練も汗だくだ。併しそよ風に揺れる若葉は清々しいものである。アッツ島の勇戦を偲び明日から外出には、警戒警報下と同様の服装をなす事となる。近時発疹チブス流行とのことシラミに注意され度し。 （石川）

六月三日 曇 連日の酷暑に対して、何と言ふ変り様だらう。うすら寒い天候、夜雨降る。雨の音ハ静かで、きゝすませバ身も心も落ついて来る。

六月四日 別段変わった事無し。明日母来る故に、長い一日だった。

六月五日 晴 近頃は快晴が続く。朝目を覚まして陽光を見、快哉を叫ぶ。朝早く母来る。

海の聖将山本五十六元帥の国葬今日敵に取り行はる。機上に壮烈な戦死をされた元帥の魂は、国民の黙祷の裡に多磨に鎮ります。荘厳な戦死—陣頭指揮—攻撃精神、我等唯その教に順はんのみ。山本元帥の国葬に因んで遥拝式、終って護国神社に参拝す。中央食堂で二人で一人前を出したさうである。せち辛い世の中だ。どうも今日に相応しくない一日を送ってしまった様な気がする。山本君の体、どうも変だ。健康相談でもしたら。

六月六日 晴 ラヂオ体操又チョコ。これで連日三十銭、決算日がうらめしい。九時過友をさそって母の許に行き、三越、丸井その他を順礼、アイスクリームその他たらふく食う。暑さを我慢して昼から円山公園に行く。神前久しくぬかずく。あちらこちらで運動会がある。総合グラウンドに行くと、メリアス組合の運動会あり、自転車競走に血をおどらせ、胸をはり、若さにおどるメッチェンの運動を見て帰る。御機嫌全くうるはし。札幌ゲキ場、美〔一字はッ?ヶ?〕奴、有島通夫等の唄を聞きにゆく。二円也フンダクられた。母帰る十一時三十四分。久し振りで楽しい一日だった。舎に変わりなし。

六月七日 晴天 こんなに暑くなると、何をやっても嫌になる。氷でも食ひたい。五時間目休講、快的!!退舎された土居さんに会ふ。別に変った事はない。どうも日記を長く止めてしまって誠に申訳ない。(野尻記)

六月八日 学部三年目島松へ行く。健さん西へ走る。舎の静かさや正にいはむかたなし。今日は大詔奉細載日。打続く感激事に迫られた吾々の胸に新なる米英撃滅の灯が燃へる。快なる晴朗さ。ねむる事の楽しさ、心良さ、又一入りの感じ。初夏の午後を心良き午睡に桃源境を飛行機に乗って走ってみると例の者“オイ、オイ!起きろ!”此処迄は良い。未だ幻の境に聞く此の声も仙人の声だ。そのあとがいけない。“風呂へ行かう”、“シラミがあるから、いやだ”“フン、起きないと胴上げだぞ”さすがの俺も起きちゃった。正にボンロズ?兄弟にひかれて錦湯まゐりと云ふ凶。夜、大谷屋へ太田さんをうまく誘惑して、十一人、モリ二杯づつおごらせる。誘惑の名人の技、正に〔一字不明〕境に入る。それより河村と二人、土居の新しき下宿を尋ねて九時半帰る。静かな初夏の気の中に、冷たい様に落つた舎の建物から、まばゆいばかりの電燈が各窓からもれる。月は三日月、星の降る様な夜。 北野

六月九日 天候快晴 真夏を思はせるやうな若葉に照り輝く陽光は暖かい。白イ(メッチェンの)上衣も眼を射る。こう晴天続きでは島松野營の学部の人々も延びてゐる事でせう。体格の宜い方ばかりだから、さして心配は要らぬと思ふが。生菓子の配給があった。“生菓子は甘くてうまいものだ”と思ひ出した頃には掌の中にはもうなかった。何と言ふ物足りなさだらう。舎は平和であるが、学部三年の「お年寄り方」が留守なため落着かぬものがある。けれども家の主人(アルジ)がゐないと、一家の者はやれやれと肩の「こり」をのばすと言ふが、その気持も略々うかがひ知れる点もあるらしい空気が漂ふ。

六月十日 相変わらずよい天気。舎はひっそりかんとして食事の時はばかにさびしい。久し

ぶりに午前中だけで学校が終って帰ると、とたんに公区の防火演習に引っぱり出され、  
いとも鄙びた御婦人連とばけつの水運び。此頃は剣道等すっかりさびれてしまった。

六月十一日 金曜 風まじりの陽光、“赤とんぼ”が斜になって北の方に飛ばされて行っ  
た？学校から帰って、薄暗い廊下に差掛ると、二号室の扉が空虚に開いてゐた。ぼとん  
と、深い湖に木の実が落ちた寂しさ。太田さんがもう居ない。新しい光が半透明体を通  
れさうで通れない。新しい力が湧きさうでゐて、何所かエネルギーが欠けてゐる。舎の  
空気はそんな臭味を漂はせてゐる。後一押だ。今躊躇してゐたら泥沼みたいに沈滞する。  
俺は今体が悪くて駄目だ。それだから、焦慮するのだ。舎に新しい生命か息吹がかよひ  
さうでまだまだ。学部の老体達は忙がしい。だから新鋭な予科の者が推進せねばならぬ。  
案外、冗談なんか飛ばして笑つてゐる人にその力があるのではなからうか。

六月十二日 土曜 マブシイ陽光をあびてラヂオ体操をする。島松野営の人々が今頃猛烈  
に油をしぼられてゐるだらうと思ふと、自然体操にも気合がかかつて元気が出る。午後  
義兄が来たので町をブラツキ、足にまかせて喫茶店に立寄りツマル丈けツメタ。此所数  
日の間一人なので夜は室に閉ぢこもり、空想をめぐらし一人ホホエミながら孤独を楽し  
且つ読書にふける。

六月十三日 日曜日 暑くなれば、暑くなるもの、台所の醤油瓶の栓がぼんと飛んでしま  
って、お婆さんの慌て振りたるや見るも気の毒。札幌地方に地震が襲来。この寄宿舎の  
歪も一層大きくなつたらう。この日曜を、各自、めいめい好きな様に楽しんでゐる。北  
海道医学会大会の為、小生は、一日聞きあかす。島松へ行った人達、十二時頃帰られる。  
聞けば、朝も明けやらぬ二時半よりの行軍とか、皇軍の苦勞を十分偲ぶことが出来ただ  
らう。土産に持って来て下さった、鈴蘭の花束は各室の机の上を飾り、その特異な馥郁  
たる香氣は、春を十分に満喫せんとする若人の心に共鳴する、エーテルの波動をもつて  
ゐる。友人の切替君が

白珠のこの白珠の美はしき抱きてながむ白き辛夷（はな）咲く

こんな歌を詠まれてゐるが、これもきっと、鈴蘭を歌つたものだらう。美しい花である  
この花は。七日の日に神戸へと姿を消した渡辺健さんが、大きな抱負とロマンチック  
な夢を、帆一杯に孕んで帰つて来られる。帰つて来られる迄は良かったが、陸軍  
技術将校の短期現役の試験が終るさ〔二、三字不明〕ことを聞いて、がっかりして  
ゐる。本当に気の毒である。明日から札幌神社のお祭りか、街角に、長い幟が立っ  
てゐる。（望月記）

六月十四日 月 本日より札幌神社祭。学部三年目、島松野営より帰り、舎もやゝにぎや  
かとなる。夕食はボタモチ、快適!!（河瀬）

六月十五日 火 決戦下、意義深く再び迎へた札幌神社大祭の日。此の日、舎生は、午前  
五時に全員、札幌神社参拝した。若葉青葉に埋れた神苑は、あくまで清浄に掃き清めら  
れ、森巖の気一しほみなぎる。この朝、静かに明けゆく神苑の玉砂利を踏んで巻脚絆、  
モンペに武装した市内男女中等学生、国民学校生徒、公区諸団体の参拝を筆頭に一般参

拝者の敬虔な祈りの姿が、蜿蜒と続き、決戦下の祭礼にふさはしく境内は賑ってゐた。朝は赤飯、晩はエッセン豊富、此の日は食物に不足で困る事はなかった。夜も、外出する者多くて、寂しい。山本君、野尻君は帰省、充分に楽しまれる様。 内田記

六月十六日 水 札幌の夏の三日の祭りも今日迄である。朝は赤飯、夜は志るこ。食堂から眺める道行く人々も青葉に色鮮かに映り、舎の内外祭りの気分が漂ふ。併し、志るこや赤飯を食べながら語る話題は今日発表された夏休みのアルバイトのことで、決戦下の祭には浮いた気持も起こらない。今日、臨時議会が招集され、首相の熱烈な一語々々が夜のラヂオで放送される。

六月十七日 (木) 緑の札幌は麗しい。アカシアの花咲く札幌は詩的だ。木々により若葉の色違い、淡緑、濃緑、陰陽、実に奥深い美しさである。一刻千金の此の頃だのに自分は無為な一日一日を送って居る。それは何から来るか。虚世の煩瑣か自己嫌悪か。人に我を知られんことを求むる勿れ、未だ我人を知らず。

責めるまい 慰むものとして いまやなし

まなびまどより 落ちる日を見る (中村)

六月十八日 (金) 昨日に引続き全学会春季大会体育祭、八時半菓子配給に釣られて行って見たら体操をやらされて配給は昼からと云ふことでがっかり。お昼に再び出かけてとうとう貰ったが一口で平げた。夜は音楽会へ行った人も大分あるやうだ。明日から予科二年目及び実科の野外教練島松行、舎も又ひっそりすることであらう。今日から網戸をつけた。

六月十九日 北野、河村、内田、中村、佐本、石川、河瀬、岩瀬、本朝予科ボーイ、及実科の諸氏、島松へ向ふ。朝のラヂオ体操大いに淋しい。舎ガランとして、廊下を歩く音も空虚なり。

六月二十日 (日曜日) 野尻、山本帰舎す。野尻君の父上様来る。野尻君より、お土産の生菓子頂く。田崎君入舎。ひる〇〇を菅沼副舎長殿より御馳走に〔一字不明〕る。

六月二十一日 月 夜決算。午前中雨、そろそろ梅雨の頃来りしならん。午後、雨止む。久し振りに冷々せる天候。この雨が晴れるとやがて酷暑が訪れるならん。

六月二十二日 火 本日やっと雨上がりとなる。夜は相変わらず涼しい。お午頃、予科・実科生、島松より帰る。虱は日光へ!!と黒板にかいてあるのも誰か知らぬが気が効いてゐる。菅沼

六月二十三日 水 予科二年、実科二年は嶋松野営の慰労休暇。島松野営中の雨天に引換へ今日の快晴は何か〔一字不明〕家のためにも済まないやうな気がしてならない。午前中秋葉さん外予科二年の人若干で味噌、醤油の配給をとりに行く。舎の野菜畑の状況は、副舎長外秋葉さん達の骨折りで除草され、きれいになってゐる。馬鈴薯、菜、豆の生育状況良好、菜〔四字不明、一字は菘?〕南瓜は種子や日光の関係であまり良くない。只収穫の歡びを待つばかりだが舎生一同よく面倒をみてやって欲しい。四圍の景色が鮮かになるにつれて身も心も明るく輝くもの。しかし落着いて頑張らなければならぬ。

六月二十四日 木 快晴、午後曇る。六月も終りといふに一寸も暑さも感ぜられぬ。内地に比べると全く極楽境だらう。昇る朝日の光を浴びて七時十五分からのラヂオ体操が行はれる。昨日から学校にて札幌農学校の先輩でもあり且又舎の古い先輩でもある、日本に於ける蜂の権威徳田義信氏の話聞いてゐるが、愉快的な蜂の世界の話に時間の立つのも忘れて了ふ。常に遠き千葉にあつても舎の事を思はれ、何かにつけ世話して下さる先輩なので、講義が終つてからは是非来舎され、御話下さる様頼んで見た所、先生今回の旅行は成るべく早目に切上げ帰宅され度き意志にて、且、今迄ずっと旅行に出て居て随分疲れてゐるのでゆっくり話しをする気のせぬ為今回は是非勘弁して呉れとの事で、已むなく断めて辞去した。甚だ残念であつた。 (三宅)

六月二十五日 金 暑くなく寒くなく丁度よい気候である。静かな夜、時計台の鐘の音、植物園の蛙の声、その静かさを破り今にも脱線しさうな音をたてゝ市電が走る。読書に初夏の風を満喫してゐると真赤な俗悪な化粧をした蛾が燈火のまほりを舞ふ。折角の雰囲気をこのデリカシーを失ひたる二つのものに破られるのが、いかにもいまいましい。  
K・K

六月二十六日 土 寄宿舎は社会の一原子。組毎に朝っぱらから注水訓練をやつてゐる人々の姿を横目で通り過ぎるやうな真似はしない。皆、巻ゲートルも青年らしく、面を緊張させて、登校する。防空演習も演習の域を脱して、實際的な迫力がある。明日は寄宿舎の一大行事「月次会」があるので、準備にいそいそとして砂糖の配給を取りに行つて来た。アカシアのほんのりと紅があるかなしかの花房が馥郁と街に甘い匂に人を酔はせる。夕食後、黍団子のお菓子が久しぶりに胃袋の欲望を満足させた。夜は「焼夷弾」が舎の周りをうろつくので、ゆっくり読書するひまもなく、ゲートル着用物々しい服装で、「いざ鎌倉」に備えてゐた。此の物々しさと、遠蛙〔?〕の起然たる鳴声が、妙な対照を為して、でも非常時日本の静寂さを保ちつゝ、インヂゴの夜空も、濃緑の楡も、混然と漆(ウルシ)に染つてゆく。明日の大きな希望を蔵して、舎も眠におちたやうだ。明日の英傑が出る。日本の捨石となる力持が出る。舎は其の揺籃だ。  
Y・Y

六月二十七日(日) 晴 「新入生歓迎会」の付箋で二字不明、今日? は新入生歓迎会が行はれるのでお婆さんは朝から張切つて御馳走を作つておられた。宮部先生、鈴木先生、亀井先生、徳田先生の御来舎を得て六時から開催された。新入生の挨拶の後、徳田先生より御権威の蜜蜂に関して有益なるお話があつた。歓談裡に八時半頃閉会した。先生方をお送りしたのち、食卓を囲んで雑談に入った。副舎長より配給当番にあつた者は責任を以て行ひ、お婆さんに報告する様に注意あり。ラヂオ体操の欠席の総決算を行ひ、納入会として牛乳が配給された。〔一字不明、最?〕内田君の六十銭なり。

六月二十八日(月) 晴後曇 特別に変わった事もなし。夜、佐本君が帰舎されたやうだ。予科生徒は学期試験の準備で忙しさうだ。 (秋葉)

六月二十九日(火) 晴 近頃は少しく涼しい日が続く。舎内、変りたることなし。(河瀬)

六月三十日（水）快晴 学部生の査閲あり。暑い夏の陽光を浴びて疲れた。もう何も書きたくない。初夏の夜は、かへるの音が「しんしん」と、故郷の水田を思はせる様に響いて来る。こんな夜、懐郷の情に耽るのも亦、いゝものである。夕食の時、パンと桜菓の配給あり。

〔寄宿舎日記・昭18・7〕

七月一日 今日も快晴。今日から東京都誕生。本屋は今日から予約制になる。夜、ソロモンの我が占領地に又米兵上陸の報、緊張を感じず。

七月二日 ソロモン群島中のレンドバ島に輸送船、巡洋艦よりなる敵有力部隊出現、その一部は同島に上陸した様である。これに対し、帝国海軍航空部隊は、数次に亘り果敢なる攻撃を加へ、輸送船六隻、巡一三隻、駆逐・一撃沈破し、敵機三十一機以上を撃墜してゐる。今や最前線では真に一瞬のゆるみなき苛烈な決戦が展開されてゐる。我々学徒は、率先垂範、戦争生活に徹底し、実践力を大いに養ふ必要があると感じた。 内田記

七月三日（土）薄曇 23・5℃—20・5℃

愈々試験の時間割り発表された。そろそろ馬力をかけずばなるまい。本日から中村、佐本両君は余市へ内田君は苫小牧へ実習に行かれる。腸チフス内服予防及治療剤「ヘテロゲン」の配給あり。怪しげなる薬とは思へども注射で痛い目を見るよりはと早速一日分を飲下す。 （石川）

七月四日 日曜日 今朝、早く目が覚めたら、雨が降り相ふって気〔意味不明〕であったが、九時頃から猛烈に暑くなって来た。今日ハ小母さんの御子息、病氣入院中なるに付き、健さん、菅沼さん、台所で、アルバイトの芋むきを為す。夕食ハ菅沼さん名腕を振って、非常に一生れて始めての—何とも云へん程の—味のある御馳走を料理された。

附記、今朝、野尻、山本、島松に伺ふ（本日より欠食） 三村

七月五日 月曜日 午後四時半頃、寄宿舎と同じ公区から、二人応召されると云ふので、在舎生四、五人で西五丁目辺迄見送る。学部の方は、中央講堂での特別講演に出席されて、この時は不在であった。近時、盛んに応召、出征の方々がある事を考へても、時局容易ならざるものある事が分る先、夕刊は、海軍予備学生制度にならつてか、陸軍に於いても操縦見習士官制が制定された事を報じてゐる。夕食後、三宅氏よりキビ餅を御馳走になる。 （田崎）

七月六日 火曜日 晴 今日も快晴、舎には変つた事もなし。只朝八時の急行にて秋葉さんが東京へ行かれる。此の処舎は少しく淋しく成る。予科は試験が近づき各部室共静かな内に緊張の気がみなぎる。試験の準備をしてゐると色々空想に悩ませられる。休み中のプラン等を考へてゐ〔五、六字不明〕時計は一時間半も廻つてゐる。試験準備は勉強その物より各自の心の底に動く生存意識（強者弱肉的）に、参つてしまつてとかく憂鬱だ。だから空想が浮ぶのかも知れぬ。此んな時いつも自分の心のなさに淋しくなり、大きく成れと心に叫ぶ物の環境の力は如何ともしがたい。予定は進まず、心楽しまず、新



聞紙上で大分学徒〔二字不明〕の記事が目につくのを見ると、何か現在の自分の生活に物足らなさを感じる。 北野生

七月七日 今日支那事変記念日なれど、大東亜戦争の大なる物の前に別に心に残らなかった。唯、試験の勉強がはかどらなくて、いらいらするのみであった。一年目の山本、野尻君島松より又中村、佐本兄余市より帰舎。舎は一応にぎはう。餅がし配給快適、夜、映画に出かける者多し。 北野生

七月八日 大詔奉詔日。もう木曜日、試験は余す少々、予科生張切ってみるだらうか。各部室共沈黙の内に暮れて行く。夕暮れは、特に何か不安の事を控えた黄昏時はたまらなく淋しい気におそはれる。夜物理の準備にとりかゝるが、開巻第一頁から何が何やらまるで分らない。気はあせる、困った困ったと思ひつゝ、ねぐるしい内に一夜を過す。舎に別ったことなし。飯島さん夜、日にやけて大分逞しさうになって帰舎された。北野

七月十日（土曜）九日（金曜） 別になし。

七月十一日（日） 学部一、二年目と実科の諸君は颯爽と樺太のアルバイトに出かける。我々三年目だけ居残ることは何だかすまない様な気がする。皆元気で活躍されることを祈らう。予科の諸君は試験を明日にひかへて猛勉強中。菅沼三宅両君と小生は舎のぼうやどもを連れて茨戸にボートこぎに行ってくる。〔一字不明、湖？〕上の涼風は夏を忘れさせる。夜ソバが出る。 渡辺

七月十二日（月） 午後五時頃、レコード・蓄音機及び配給のお米の一部が見当らず、盗難？と思はれ、早速、一応届ける。舎生総動員にて探すも見当らず。試験で疲れた頭で昨日の様子をお互ひ思ひ出し申べ合う。今日より当寄宿舍の創立以来始めて玄関に錠をなす事に決めた。十時以降の外出者は注意の事!!菅沼先輩諸氏の卒業退舎記念のレコードが残念だ。宮部先生を初め諸先輩に対して申訳無し。十時頃警官来り形式通り書留めゆく。明日、相談の上盗難届を出す予定。

七月十三日 火（曇） 雨が降りさうで仲々降らない。此処らで一雨来ぬとそろそろ早ばつの心配が起る。学校のローンの枯れたのが大分目立って来た。もう二十日余雨が降らぬのだから無理もない。昨日日本日とむし暑い厭な日だ。予科生試験勉強に一生懸命。夜七時の急行で秋葉君帰舎。すがぬまと三人で入院中のオバサンの坊や見舞にゆく。経過大変良好、熱も下って、そろそろ退院して舎で静養しようかと云っておられた。  
(三宅)

七月十四日（水） 眠り足りない瞼が重い。暗闇が漂ってゐる軒端に滴の音が断続的にする。久しぶりにしっとりと湿った空気が肺に入って来る。心が張切ってゐるせいか、陰鬱な感じは起らない。何時の間にか、又深い谷間におちこんでいった。試験第三日目、明日は休み。コンデーの連発に少し腐って、小説本でまぎらはさうと努力したが余り効果はない。静寂はこの舎の特徴だが、今日は又深々度の静けさ。樺太に働ける兄達はどうだらうか。無理のない作業であれと、心から祈る。明日があると思ふと怠け心がふつと起る、人間の弱さ。

七月十五日（木） 試験の中間休として、心に〔意味不明〕学校から休暇が出たのだから学校の主旨に背いては申し訳ないと、独り合点して日の高くなる迄駄眠をむさぼる。天気は良好だし、試験も後一日と思ふと心のネチがゆるんでしまって、さっぱり能率が上らぬ。おまけに熱いときてみるから尚更のことだ。

七月十六日（金曜） 明日は独逸語一科目、チョロイとばかり、すっかりなめてしまって、帰舎後すぐ床に入る。目がさめたら四時半だった。あわてて本をみれども、明日試験が終ったら先づ長次彫を見て、等々…甘い予定に魅惑されてさっぱり頁が進まぬ。菅沼さん、三宅さん、忍路へ御出張、渡辺さんは島松へ行かれた。

七月十七日 土曜 曇一時小雨 勤勞奉仕や旅行などで、残留舎生は九名になった。舎内は静寂の空気が漂ひ、蟬の鳴声がかしましく聞えて来る。今日も蒸暑い。予科生達は本日を以て一学期の試験が終ったやうだ。午後うさ晴しに街へでも出たのか、舎内はがらんとして居る。 （秋葉）

七月十八日（日曜）晴 第一学期考査、昨日を以て終了！予科生は、みんな、のんびりして居る。それに引き替え、学部（三年目）は、卒業間際で、忙がしそうだ。河瀬は明朝仙台へ。 （河瀬記）

七月十九日（月）晴 雲一つ無い快晴が甍へって札幌も愈々本格的な暑さになった。九号室の最高寒暖計は終に30℃を突破した。朝河瀬君仙台に開催の高等学校体育大会に出発す。武運を祈る。午後は友にせがまれて庭球をやる。熱汗淋漓夏期体験の成果を挙ぐ。物置の屋根の修繕始る。

七月二十日 晴 連日の殺人的な暑さにながかりする。十六貫の巨体、どう置いて見てもあつくてだるい。講義もろくに聞けず、出席をとると直ちに御就寝、時間終了前五分頃、やうやと目を覚ます者も一人ならずのある様だった。試験後の勉強、かくも憂きかと驚く。物置小屋の屋根や、舎の屋根も直された。水ももる心配もない事だらう。長い希望の一つ、上衣なしの食事今日認めらる。特別室の御大将も遂に屈服せしが如し。だが大いに歓迎する所なり。学部二年目の人、今日も御苦勞に働きたつた事だらう。 （野尻）

七月二十一日 暑い。暑い。登校しても教室はがらんとしてゐる。欠席者、出席者の数は同数位である。"型"ばかりを気にして授業をやる事が時局に添ってゐると考へてゐる思想の浅薄さ。或る時は休む事が時局にふさはしく能力的な事もあるのだ。こうあつくては勉強への熱もとけてしまふ。 北野

七月二十二日 田崎さんはドローにて完徹、あつい、あつい、だるい。

七月二十三日 毎日毎日だらだらした授業こそ身心をつかれさす。今日予科は樺太行き  
の注意あり。

七月二十四日 今日で授業は終った。あとは樺太行きと帰省あるのみ。

七月二十五日 今日が最後の歡樂だとか何とか行って町へ出る者三々五々。

七月二十六日 明日の樺太行きに備へて身体検査、フトンへねるのも今宵一夜と思へば又

感慨も湧かう。明日を思ひ浮べて夢路に入るも蚊に悩まされる。では暫しさらば。

七月二十七日 予科の諸君勇躍樺太へ出発する。健闘を祈る。居残舎生、今日から学部三年の四名のみとなる。淋しくて鼠に引かれさうな気がする。菓子の配給あり。野尻君夜の汽車で楽しさうに帰省。〔舎前での舎生らしき八人の集合写真が欄外に添付〕

七月二十八日 本日より九月卒業の忙しい連中のみ、公区の防空壕彫りに出動を命ぜらる。四人出て大いに手に豆を作った。健さん銭函にて海水浴を。

七月二十九日 残留舎生四名の生活が続く。朝夕の食事には必ず顔を会わせ共に食ふ。仲々楽しいものだ。どんよりと曇り、時々小雨が降りながら而もむし暑い。からっと貼れ、かつと太陽でも照れば、海へでも出かけるのだが。夕飯後、明日は丑の日なので、晴天なれば銭函へ行くプランを立てる。心は晴天を願ってゐたが、十時過雷光一閃、雷鳴と共に豪雨沛然として至る。落胆する事甚し。でも今晚降れば明日は案外晴れるだらうと思ひ、独り慰め寝に就く。雨の為めむし暑さが緩和され快適なり。 (三宅)

七月三十日 (金) 一日中晴たり曇たりの天気。舎内は、ガランとして寂しくもあり静かでもある。湿気の多いためか体がだるい。夜八時頃、伊藤さんの家の方から蛙の鳴声とマンドリンらしい楽器の音とが聞えて来る。なかなか良い趣なものだ。

七月三十一日 (土) 昨日の雨はからりと晴れて雲一つない。昼近くに、三宅さんが実習に出発された。午後三時半頃から、菅沼、渡辺君、自分と賄のおぢいさんと四人で、玄関の前へ空襲時の待避所を作った。どうやら役に立ちさうな出来栄えだ。今朝、防空係の人が来て、待避所を作るについて、菅沼君と押問答をやって、少々腹立たしさうに帰って行ったが、その人が、自分達が作業をして居るのを見て、なかなか立派なものが出来ましたネーとニコニコしてゐたが、人間も立腹したり、笑ったり、面白いものだ。先達って、盗難にかかった蓄音機とレコードとが見つかって、明日、警察署へ受取りに行くことになった。之でまた、あの歌が聴かれる訳だ。安心して卒業出来るとか、さる人も一言漏して居た。夜になると、植物園の方向から、ホーホーといふ鳴声が聞えて来て、一層物寂しさを感じさせられる。田舎の人は、あの鳴声を解釈して言はく、「ボロスケボーコー (鳥の名前ならん) 太郎が叩いた、おゝ痛いナ」と。 秋葉

〔寄宿舎日記・昭18・8〕

八月一日 (日曜) ぬすまれた蓄音機とレコードを受取りに行く。第九のみをのぞいてあとは全部あった。狸小路のレコード屋に売られてあった。あそこなら心当りがあったので先に手を廻しておけばよかったと思ったがすでに後の祭である。

八月二日 (月曜) 小生銭箱海岸に水泳をする。往復の汽車の混み様は殺人的である。思ったより水があたゝかい。泳ぎよりも海を眺めに來てゐる人が多い。

八月三日 (火曜) 樺太より勇士の面々帰り来る。日焼した顔肩胸、奮闘のあとがしのばれる。皆元気で安心する。〇〇まじりの土産話も戦時下らしい。夕飯は皆思ひ思ひに出かけて行つたらしい。本吉君入舎される。

八月四日 (水) むしあつい日がつづく。小生終日論文に没頭するも暑さには少々閉口。

故郷へ帰る人々、その支度に忙しさうである。中村、本吉君、夜の汽車で帰省。渡辺

八月五日（木） 三村君帰省、又々舎内淋しくなった。

八月六日（金） 居残舎生蚊になやまされる者多し。連日うだるやうな暑さがつゞく。

八月七日（土） 飯島、望月、内田の諸君と小生銭箱へ出かける。船をこぎ出して大いに海の香を吸って来る。

八月八日（日） 望月君急に思立って旅行に出かける。七夕のかざりが諸所で見られる。

八月九日（月） 今日は少しすずしい。佐本君連日登校して奮闘。

八月十日（火） パンの配給あり。内田君毎夜のアルバイトに出かける。草にすだく虫の音聞え、はや秋の近きを思はせる。

八月十一日（水） 健さん朝十時頃、大雪山へ出発す。

八月十二日（木） 大本営発表、八月十二日朝、米機「コンソリーデーテッド」B 2 4 五機、及び「ボーイング」B 1 7、3機北千島に飛来せり。我が陸航隊は、その中5機を撃墜せり。我が方損害軽微なり」と発表があった。此の際、特に民防空に対する国民決意の昂揚が要請されねばなるまい。

八月十三日（金） 晩十時過、先輩小林茂さんが来られた。久し振り愉快地に軍隊生活や舎の推移に就いて話した。

八月十四日（土） 小林君昨夜舎に泊り、昼、分遣隊恵庭に行く。今夜は涼しい。夜健さん旅行より帰へらる。

八月十五日（日） 今日はお盆なり。而して日曜なり。然れども、早朝我等残留舎生、秋葉、渡辺、飯島の諸氏並舎の令夫人（清チャンは早朝の為欠席）長鋤を振ひて舎の農園を耕す。予、先日来勤労作業に於て鋤を振ひたる腕未だ衰へずして玉なす流汗と共に農園の土見事に鋤かれ畝築かれて来るべき豊かなる収穫を物語る如し。

八月十五日〔十六日の誤り〕（月） 今暁二時五十八分、月蝕あり。秋葉氏此の千金の一刻をのがさず科学的観測の貴重な資料を得たり。健さん三時間後に来る。ラヂオ体操に備へ、清氏と予輩、昨夜の猛勉の為、この歴史的時間をも敢て睡眠を摂るの止むなきに至れり。

八月十六日〔十七日の誤り〕（火） 舎生四人わびしく、予科生近日凱旋すらむ。S氏とM氏南と北より身さかるゝ思ひにて帰る日も近からむと噂す。朝より雨降りて秋冷の気窓に入り、清チャン不在の室に一人居るは気滅入るものなり。（飯島）

八月十八日（水） 曇 半月の勤労を終へて午前〇〇時感激の第一歩を札幌の地に印す。僅の留守とは云へ一字一木に再会の思ひを馳す。故大西君の告別式を終へ帰舎するやヨシチャン等の歓声に迎えられる。兄さんの元気な姿と思ひ懸けない蓄音機に新たな喜を見出す。〇週間振りに風呂に入って今夜は憧れの蒲団に寝んとす。（石川）

八月十九日（木） 曇時々小雨 早朝河村、北野両君帰省される。続いて岩瀬君も帰られた様だ。小生指定を取りそこねて明朝発を余儀なくされたので夜ははやる望郷の念を映画にまぎらす。虫の声もそろそろ賑やかになった。もう秋だな一。夜、山本君帰省。石川

八月二十日（金）曇 樺太の習慣で、四時半頃眼が覚め、起きて散歩する。然し、疲れて午睡を二、三時間取る。待望の解析概論、手に入る。実にウレシイ。望月氏、目下盛にマルタ・エゲルトの唄を懸命に練習中。

八月二十一日（土）晴 今日又、暑さが舞ひ戻って来た様な天気である。菅沼健さん、三宅さん、午後から海水浴に出掛け、帰りにキュウリ、ナスをぶら下げて帰られた。野菜、魚類が配給制になったので、今後氏の様な機会のある方はどしどし利用されん事を御願ひ致します。夜食堂で決算を行ふ。二十三時の汽車で、河瀬君帰省。

八月二十二日（日）晴 今日も昨日と同じ位、朝から暑い。朝三村さん、中村さん帰舎される。青森駅の連絡船待合室で、三村さんが石川君に会ったとの事である。三宅さん、銭函へ、内田君は大学プールへ夫々泳ぎに行かれた。学部の方は愈々明日から学校が始まる相で、誠に暑いのに御苦労さんである。毎夜の事ながら蚊群には悩まされる。玄関前の牧草を抜いて来て、燻して蚊退散方法を講ずる。 田崎

八月二十三日（月）雨 菓子配給あり。雨なれどむし暑し。

八月二十四日（火） 小生の論文も九分完成。学部一、二年の諸君は試験に具へて勉強。蚊がなかなかうるさい。 渡辺

八月二十五日（水） 曇天にして蒸し暑し。送別会五日に内定との事。 菅沼

八月二十六日（木） 一雨毎に秋が深まる。予科生は未だ休んでゐる。学部三年の卒業の日も近づく。机など荷造るのを見ると何かあわだゞしさを感じず。巢立つ人々の嬉しさ又淋しさ、後に残される者の淋しさ。而し何れにしても、学部を卒業される人々は非常に幸福であると共に、国の其の人々に要請する所も亦如何に大きい事かと思ふ。舎には変った事なし。学校では新角の卵が見受けられる。 佐本記

八月二十七日（金） 晴後曇、夜小雨ちらつく。残暑らしい暑さが続く。じめじめとむし暑いと稲熱病が湧くと聞いてゐるが折角豊作の予報が出てゐるのに虫なぞわかぬとよいが。天高く馬肥ゆるの秋と古人は云つたが最近魚、野菜の統制が始まり、事務円滑を欠く為、新鮮な野菜が充分口に出来ぬのは遺憾である。郊外に買出しに行けば、経済警察とかの目がうるさいとの事。今年最後になるかも知れぬ北海道の秋といふのに、味覚をそゝるトマト、水瓜、トウキビが口に出来ぬかと思ふと此づか（？）寂しい。と思つてゐたら食堂でエッセンありとの声、飛び出して行ったらトウキビがごっそり煮てある。実科の連中の土産だ。感激してもりもり食ふ。 （三宅記）

八月二十八日（土）曇後晴 授業始マッテ以来最初ノ土曜日ダ。明日ガ日曜カト思ウト心強イ。家カラ黒部水瓜一個送ッテ来タ。夕食後皆ト充分味ヒナガラ食べる。コレガ今年ノ最後ニナルカモシレヌ。大分蚊モ少ナクナッタ様デアル。 （本吉記）

八月二十九日 晴 昨日あたりから風が吹き、少々涼しく感ずる。陽ざしも秋らしくなつて来た。畜産学科の人は、競馬を見学に行ったやうだ。

八月三十日（月）晴・驟雨あり 昼頃味噌の配給を受けに行つてきた。醤油の配給は炊事のおぢいさんが受取つて来たらしい。夕方、野尻君久し振りで帰舎。

八月三十一日 雨 夕食の天婦羅に一同舌鼓を打つ。夜西瓜の御馳走あり。試験を前に控えてか、舎内はひっそりしてゐる。時々鼠が雷のやうな音を立てて、天井を駆廻る。くるみの木の葉から雫が、トタン屋根へとパラパラ音をたてて落ちて居る。静かな晩である。(秋葉)

九月一日 雨がしょぼしょぼ降って、陰気な一日ではあった。学校から帰って来たら、生菓子の配給があり、早速一つ二つ三つと、口にほうばって、食べてしまった。晩七時頃、警戒警報がかかった。五日の送別会のため、ぼちぼち慌しくなってきた。蚊が居なくなると感づいた頃には、もう、秋になってゐるのが、とても寂しい。蚊の居ない夏があったらなあ。(望月)

九月二日(木) 昨日の警戒警報が続いてゐる。準備はよいか、暑さに弛み勝ちな心の紐を強く締め直して、防空必勝の信念を固めねばならない。去る六月二十八日、防空必携が改訂されてから今回が最初の警報発令である。改訂防空必携を再読熟読しておく必要があらう。夕食後、トマトの配給一人五個以上あり。近頃の副食物は粗品が多い。味はそれ程でなくとも、ともかく材料が揃はぬらしい。これも時節柄、戦時下に於ては無理もないと諦めてゐる。内田

九月三日(金) 警戒警報解除さる。九月一日に我南鳥島への来襲は航母を基幹とする機動部隊であり、一六〇機を以て攻撃したものらしい。米英は、七月末以来ハンブルグ、ベルリン、ニュールンベルグ等の重要独逸の都市、更に伊太利のそれに対し、無差別攻撃により、人的資源を涸渇せしめ遮二無二戦争に打勝たんとする戦法に出てゐる。今や敵の神経戦術は、漸く本格的な攻勢に変らんとしてゐる。我が本土への来襲は必至であらう。逞しき神経を以て、又剛毅沈着こそ敵に打ち勝つ第一要諦ではなからうかと思ふ。舎内別段変った事なし。

九月四日 九月に入ればもう秋も暮を思はせる。玉蜀黍も終りだ。西瓜が味覚を楽ませる頃は段々と寒さが襲ひつゝある時だ。学内では、卒業生送別の宴が所々で催され、殊更に秋の寂しさを増す。后十時、予科生四名帰舎、北野、川村、石川、岩瀬。又平常の賑やかな舎に帰るのだ。試験で懊悩中の学部、実科生に故里で貯へた英気・エネルギーを注入して下さる事を望む。中村

九月五日(日) 予科生は思ひ思ひの娯楽を求めて早や舎に影なし。吾等は机を離れたくとも目前の試験を控へて時間の経つを焦る。映画此の頃「世界に告ぐ」と「白鳥の死」の再来でちと近頃の顔色を返す。中村

九月六日(月) 雨後曇 予科生は本日より第二学期が始る。級友達にも久し振りで会ふと親しさが増す様な気がする。送別会九月十一日午後五時からとなる。夜西瓜の配給あり。小さいながらもうまかった。[署名の一、二字不明] 生

九月七日 夜八時、夕食後、M、I、U氏等と談ず。10時頃W氏を加へて、増々気炎を上げる。もうそろそろ朝晚上衣無しでハ嚏の出る気候と相成った。早いものである。学

部を卒業する方が舎にも四人居る。四人の先輩を一時に送出したら、どんなに淋しくなってしまうだらう。然し、卒業する人々の、洋々たる前途への希望ハ、この淋しさに打勝ってしまう。願くバ、この古びたる学舎を思ひ出して、折々ハ便をお聞かせ下さる様に。 三村

九月八日 大詔奉載日。久し振りに早起きして見たら未だ暗かったので驚いた。大分日も短くなった様だ。又雨である。夕食ハライスカレーのなりそこない。辛味零パーセントの代物だ。トマトが大部配給になったが青いのが多くてまづかった。今日は予科で乾パンの配給があったので思ひきり食った。 野尻

九月九日（木） 愈々明後日が送別会かと思ふと、急に学部四人の方が居なくなる事がはっきり分る様になり、寂しさを今から感ずる。諸行無常、会者常離の習の世とは云へ、銘々が本当に之から社会へ出られて、腕一本で切廻す事を考へれば、将来も益々之等卒業生の方々の上に多幸なれかしと祈るものである。伊太利が七月、政変を起し、ムッソリーニ首相は斥けられ、バドリオ将軍が統一して以来、チュニジャ、シシリーに於て、敗を喫し、又々南部伊太利にアイゼンハウエルを主とする米英〔一字不明、露？〕連合軍に上陸され、少くももう二、三ヶ月は持つと思ひきや、急に無条件降伏を申し出て受入れられた旨、報じてある。之によりどの様な局面に立至るやは軽調に予測するを許さないが、兎も角我々は、最悪な状態を覚悟する事益々切なるものがあらねばならぬ。 田崎

九月十日（金） 明日に迫りたる送別会の打合せをする。四人を送るなんて、どんなにか淋しいだらう。秋風が吹く。楡も落ちるのかしらん。皓々と云ふよりはきびしい感じのする札幌の月、虫の声。何かしら求めて混沌としてゐる自分の心が、札幌の秋に余りにも冷たん過ぎると思はないでもないが。イタリーの無条件降伏、愈々吾々の覚悟すべき秋が来た。

戦はん哉 秋（とき）来る 克たん哉 秋来る

舎内に変りなし。 北野

九月十一日（土） 最後の日記が廻って来た。省みれば五カ年半の札幌生活は即寄宿舎生活でもあった。私が昭和十三年の春札幌駅に降り立った時、前副舎長平山さんはじめ四、五名の方々が迎へに来て下さってゐた時には本当に感激した。それから私の舎生活は始められた。青年期の感激と意気と混乱と沈思とあこがれと煩悶と色々なものが私の舎生活と共に私を生長させ、私を人間らしいものにしてくれた。慈父の如き宮部先生の感化は常に私に温い希望に満ちた生気を吹きこみ、失意落胆より私を救ってくれた。真理を希求し、純一なもの絶対なものにひたすらなる愛情を以て友と語り、独り思索した。混乱より調和へ、主観より客観へ、雑然より統一、分化より合一へと青年期の必然的経路とは云へお互に琢磨し合ふ舎生活の中であって、私は大いなる助を得、豊富なる教を得ることが出来た。自由を謳歌し、大望を讃美した時代と現在とは大いなる時想の転換をなしたとは云へ、舎生活の意義は少しも変らない。その大いなる愛と深き教は私の生涯

を通じて忘れられない思出となるであらう。美しい自然の中にあつて、このなつかしき舎に多感なる青年時代を送ることの出来た私は幸福であつた。さらば、共に在りし、共に語りし諸君よ、会ふは別るるのはじめとは云へ、哀愁の情禁ずるあはず。諸君の多〔欄外「送別会」のシールで数字不明〕り、あはせて共に報国の誠をつくさむことを誓はう。渡辺記

夕五時より送別会あり、宮部先生は急に御都合悪く御休みになる。誠に残念である。逢坂、北村、前川、〔一字不明、時？〕田、田村の諸先輩出席され、近来にないにぎやかな会となった。委員諸君及小母さんの心づくしのごちさうをいたゞき、送別の辞、答辞と進むにつれて送らるる身の名残惜しさふつふつとわき出て止まらない。福本さん、斎藤さんも出席されて共にありし日の思出を語り合ふ。考へれば五年半といふ長き年月も過ぎればつかの間の如くいたゞらに〔一字不明〕行く駒の足速みをなげくのみ、されどちぎりし縁はこれを以て切れるにあらず。いかに遠く互に離れ行かんとも、お互に心は遠く通ひていつまでも諸君と共にあるであらう。さらば寄宿舎よ、いつまでも若く健かにありて、今後幾代にも渡つてよき青年の道場たらんことを庶幾ふう。

九月十二日（日曜日） 昨日送別会があつて又今日は農学実科の収穫祭である。運悪く早朝から雨に見舞はれて苦勞した。今日は二百二十日であるとか。この位の雨で済むなら有難いと呑気な事を言つてゐる老人がゐた。夜晩くまで後片付けをして、ミルクとぜんざいを収穫祭の残りを舎生の皆んなに御馳走する。今度卒業される学部の四人にも飲んで戴いて非常に満足した。一雨毎に夏の色がさめて、秋の涼しさが近づくのを感じずる。（佐本記）

十三日（月曜）（曇後晴） 午前七時全舎生揃つて秋葉君壮行の朝食を共にする。オバサン心尽くしのオカシラ附きが卓上にのつてゐた。七時半、全舎生、賄のオバサンも秋葉君見送りに駅へ行く。夜来の雨も上つた。八時の急行は空知地方一部の水害の爲石狩線を廻つて来たらしく、桑園駅の方から入つて来た。舎生の腕で秋葉君の席もとれた。にこにこ笑つた秋葉君の円満な顔を見ると、六年間の札幌に於ける学生生活を無事に終へられる喜びに満ちてゐる。何れ程か田舎に居られる、全君の父母は喜ばれて君を迎へる事だらう。全君の前途に輝きあれと祈り“秋葉善一郎君万才”を以て送つた。友の一人を送つた後は櫛の齒の一枚が落ちた様な寂しさを覚へる。午後久し振りに晴れる。校庭に流れる午後の陽光に芝生の緑が目にしみる程美しい。二百二十日も無事に過ぎた。秋が爽かにやつて来る。（三宅）

十四日（火）晴 四五日来カラノ雨降りカラ開放サレ全ク気持ノ良イ日本晴デアル。モウ秋モ近ゾイテ来タラシク朝ナンカハ吐ク息ハ白イ。嗚呼又アノ寒イ冬ガ来ルノカト思ウト余リ良イ気持モセヌ。渡辺サン今夜ガ最後デアルト思ウト今少シ一緒ニ生活シタイト思フ。今夕食ノ後玉蜀黍出タ。ナハサン身ヅカラ郊外マデニ行カレテ我々ノタメニトノ温イ御心ニ対シテハ何トイッテ御礼ライワウカ、全ク感謝感激ノミダ。本吉

九月十五日（水） 爽かな心持で〔一字不明、窓？〕を明ける。蝦夷の昔を偲ばせる楡の



巨木が梢ほの暗く、静かだった。大きなものゝ、聖なるものの誕生をまつ静寂と思はれた。日の光は、こんもりとした茂り合ひを貫く事が出来ず、二筋、三筋、黄金色に奥深く射してゐる。敬慕兄の如き“健さん”は、この爽かな朝、走りゆく汽車のデッキに立って、何時までも何時までも手をふって、住み馴れた幌都を去られた。智的、静的、愛情深き“健さん”にあまりにも相応〔一字或は数字不明〕い美しくも清き朝であった。

“健さん”どうぞ何時までもお達者で…舎生一同祈りつゝ手を振るも、ぼっと涙にかすむ自分をどうすることも出来なかった。舎の流し場新築、乾パン一袋配給。明日は教練査閲、エネルギー保存の意味に於て、早々寢床にもぐる。十六夜の月の流よ。

(山本)

九月十六日 予科査閲で皆消耗した。講評は芳しからず、誠に箕輪大佐殿にお気の毒であった。夜空にポンポンと云ふ音響く。何やら知らぬが明治節の明治神宮の御祭の花火を憶ひ出す。夜空に咲く花火…夜店の雑聞…見世物小屋、代々木の原のざわめき一幼き日の憶出が目に浮んでくる。追憶は哀しきものである。 一河村一

九月十七日 愈々今日から実科の連中の試験だ。皆自信ありげでたのもしい限りだ。今朝早く予科生活に終止符をうって田崎さんが帰省された。予科三年生の諸兄は大部分が帰省されたらしく、予科はひっそりして来た。夕食後学部、実科の人々、試験慰労の為か、お米一升おばさんから戴いた。明日は予科の体力検定なる為早くねる。岩瀬

九月十八日(土曜日) 予科は体力検査だった相だ。秋の一日を、運動競技場で、のんびりと送るのも亦、異なる味もあらう。おばさんの所へ蒙古から弟様が見へられた。本日挨拶があった。洋装の奥様も一緒だ。洋行帰りの夫妻は実に立派だ。第一にトランクが素晴らしい。今日、二人の歩くのを見ての感想である。土曜日なのか、予科の連中は居ない。工学部の連中、実科の人達は明日は試験はないと見へて悠々としてゐる。秋の夜、肌寒い風が窓の隙間を通過して入って来る。虫の音も寂寥を感じさせる。「現在の吾々、学生は然し之の様な安易な生活を送ってゐる丈で良いだらうか。徒らに感傷に耽り、イージーな歩を続けてみて良いだらうか。」俺は心の中で何か、慙愧に耐へぬものがある。アツツの玉砕を知り、イタリーの降服を知ったときは、生きて恥を忍ばんよりは、死して、護国の鬼とならんとも思ったのに、その信念も感慨も浮世の荒波の中に消へそうになる。何時も「何に糞」と言った張切った気持であるのは困難なものだ。大いに日本男児たるの意気を以って進まん。(望月)

九月十九日(日曜日) 札幌の様子も大分秋らしくなって来た。今日、特別風が強い。学部、実科の人達は試験で急がしいらしい。 河瀬記

九月二十日(月曜日) 昨夜来の風で、舎の東側の大木が一本、根本から折れて倒れてゐる。舎内無事。 河瀬

九月二十一日(火) 三村と小生の試験終る。

九月二十二日(水)

九月二十三日(木) 夜決算を行ふ。 飯島

九月二十四日（金）飯島さん帰省される。国家の要望により文科系諸大学の教育停止が発表された。此の切迫した時局に於て、教育を尚、受けられる身の幸福をしみじみと感じた。

九月二十五日（土）舎内は、卒業生ら帰省された人がある為か、寂しい感じ、物足りなさを感じる。夜九時頃、ソバの主食があるらしい。それ迄楽しみに待たう。

九月二十六日（日）退屈な日曜日。アカシアの枯葉を巻く秋風もそろそろ本格的である。去年はこんなに寒くなかったのに今年はどうしてこう寒いのだらう。

九月二十七日 朝は床から出るのが大儀な程寒くなって来て、皆起きるのがおそい。だが、寒さを超えて朝早く起きると何となく気がすがすがするものだ。夜、パンの配給あり。三宅さん買って来たジャムをつけて美味しく食べる。九時（夜）に南瓜が出る。遠に皆も腹一ぱいの為か半分位残った。三宅さん、十一時半の汽車で故郷帯広へ帰られる。先輩三宅さんの前途を祝し、御健康をお祈りする次第である。（野尻）

朝、三村さん見学旅行に出発。

九月二十八日（火）雨 18℃—15℃

部室代へてからもう三日になるが、未だ間違へて隣室へ入ってしまふこともある。舎は益々淋しくなり秋風も一入〔一際？〕冷く感ぜられる。アツツ島の英霊慰霊祭を明日に迎へて、街は雨に濡れて弔旗が立並び遺族の胸の黒白の徽章を見ては我等アツツの英霊に続かんの決意を新たにせざるを得なかった。 石川

九月二十九日（水）本日も舎内に蟄居生活を暮る。折角の試験後の休みも残す所二日。無為だった。唯、洗濯したのと一寸本を読んだ位。たまの洗濯は大仕事に思はれる。アツツ島の二千余柱の英霊慰霊祭、札幌でとり行はれる。雨降る中を中島公園で厳かに執行。学校を代表して予科二年参列、五時頃帰った。小生等は舎で黙禱を捧げた。公区としては午後七時半寄宿舍前にて英霊、生家に還られるのを迎へた。 中村

九月三十日（木）曇 午後、中央講堂で北大関係戦歿者慰霊祭があった。十七時半より、菅沼、三宅さん送別の会食。終つて、両卒業生より、舎生活についての御話しあり、後、七号室に集りてトランプに興ず。二十三時頃散会。三宅さんも、菅沼さんも、長い学校生活を終へ棲みなれた寄宿舍をあとに、巢立って行かれる。行末永く幸あれ一田崎さん帰舎。新角!!チャチチャチ

十月一日（金）晴 今朝菅沼さん戦闘帽をかぶり元気一杯退舎せられた。これが最後になるかもしれぬと云はれた、あゝ。本日から実科の第二学期始る。学部新入者ノ入学式あり。リンゴの配給あり。三宅さん最後の一夜ぐっすり熟睡されん事を望む。張切つて出発される面影目にうかぶ。あゝたのもしいたのもしい。（本吉）

十月二日（土曜） “十月一日から俺の新生活が始る” と豪語してゐた三日坊主。二日目の今日は果して朝の8時に起きたかしら。〔一字不明〕はなべて斯くの如しか。大山の様な

感じ、頼もしさに満ちた両の瞳、慈悲の眼差、三宅さんは歩いてゐる。アスファルトが新しいつややかなうるほいにぬれて、電車が通る。勤人の足音が忙(セハ)しい。毎日のプロセスが今日も繰返されてゐる。三宅さんの長い影が、冷い線路を走って枯葉にぶつかった。皆も黙ってゐた。鳥も黙って見てゐる。榆の木も。

一人の顔に、一人の瞳に、三宅さんのぬれたやうな瞳と、童顔とが、ぐっと焼きついた時、車はきしりだした。征くのだ。“左様奈良” “頑張つて” 声もかすれて、かっと紅潮した両頬に、厳肅の秋風が、とても冷たかった。軍刀握った山のような三宅さん。

“小人閑居して不善を為す” 耳に、今でもしみて離れない。静かに話された三宅さん。解りました。よろしく。陸橋から一三宅さんが通った、懐かしい、だけど淋しい。そして、夢のふくらんだ鉄路が、手稲の方に、見ても涙で見果てぬほど何所までも続いてゐた。“どうぞ御達者で” 再び、毎日のプロセスが瞳の両隅に動きはじめた。僕は黙つてた。

[十月三日の日付欠落?] 望月さん、薄別へ、御主人格の人が留守なので、一寸淋しい寄宿舎。三村さん、昨夜御帰舎。北野さん、ラグビー試合打合せのため小樽へ、増原さんの新角姿を今朝見て嬉しかった。天気は曇り勝ち、樹々は静か。入営兵の姿の多い此の頃、大いにしまつてやつてゆこう。北野さんが居ないので淋しいこと。三宅さんの前途を祝つゝ夢の[一字不明]の鍵を握る。(山本)

十月四日 文科方面の学校の学生、生徒の入営日十二月一日。吾々理科の学生も臨時徴兵検査を受けるといふ。真、国家の非常時である。吾々の生活も、決戦態勢となつた。尚予科は十月十日より一ヶ月間アルバイトだといふ。国亡れて何がある・祖国の為にペンを捨てねばならぬ秋[?私?]に銃をとる亦[一字不明、沢?]ならず哉である。吾々の心は落ち着いてゐる。吾々は、召される日の来る迄は吾々の現実をよく見て生活せねばならぬ。予科の尚存する所以如何? 国家は吾々に青白き秀才を望みはしない。吾々は教養と究学と、そして体育向上の連日を送るべきである。日曜の雨の降る事、つまらぬ事おびたゞし。一日無駄な日を送らば、それだけ国家に対し不忠である。山本は、小樽へ海洋[一字不明]員として査閲を受けに行く。小生、映画に行き、故山本元帥の“常に戦場に在り”をみて涙が出た。夜は常会あり、夜食として、オカユあり。

十月五日(火曜)午前九時より中央講堂に於て、宣誓入学式あり、終つて、各学部へ帰り、小生苦手の筆で署名をする。工学部の時間割が発表になる。水曜が八時間あるとは驚いた。晚問題の筋子が出る。分量は、いくら珍しいものにもせよ、少し多すぎる。あの半分位でも良いかも知れぬ。此頃の寄宿舎は物が豊富と見え、朝のおつけでも、割合に味噌が多く入つて、からい。寄宿舎の大先輩、現三先生が、長い間の予科教授生活から離れる事になつたので、来る八日午後四時半頃から、舎としての送別会を開く事になつた。

十月六日(水)生菓子の配給(一人四個)あり。抽選により五個の方もあり。他別段変つた事無し。

十月七日(木)晴 雲一つない快晴な爽やかな青草の上で、午後の陽光を浴びて体操をする

のは実に気持がいい。日曜なら郊外散歩をしたらさぞ愉快ならん。八時頃三村さんの室で夜食をする。一週間の練成から帰られた菅沼さんを囲んで、錬成道場に於けるユーモラスを聞く。 岩瀬

十月八日（金）宮部先生、亀井先生とともに、鈴木限三先生の送別会を行ふ。スムーズに進行し、八時頃終わってしまったが非常に印象深い会であった。限三さんの謙虚な態度は我々大いに学ぶべきものがあると思ふ。

十月九日（土）朝寝坊振りを發揮して学校へ飛んで行く。一、二時限、土佐林さんの初めての授業、印象悪い事甚しい。夜はコンパがあったが都合が悪くて出席し得なかった。自分達の級会がイロハであった。エッセン豊富、皆大いに歌ひ、大いに話し、大変愉快だった。河村、北野さん達に悪口を言はれながら、山本君と〔ゆ？〕うぎをやった。未だ覚え始めで、傍らから見られると恥しい。終わった時に、某さんに辛辣な皮肉と嘲笑に似た言葉を受けて、恥かしいやら、悲しいやら。今夜は一人ぼっちな気持ちを味ひながら寝に入らなければならない。明日は元気になろう。（但し、これは自分のひが目かも知れない） 野尻

十月十日（日）朝早く起きて月寒射撃場へ行く。今日は戦技訓練種目の高等専門学校以上十校の参加による大会である。射撃は予科は首位、個人も一、二等を獲る。柔道も優勝したとか。河瀬君おめでたう。寒さも加わり、一寸油断すると風邪をひく様な頃だ。 野尻

十月十一日（月）秋晴れの良い日である。夜は月冴えて星がかゞやく。午後九時半の急行で菅沼さんが入営のため帰省された。六年間の学生生活を終えて、興農公社へ一応就職し、今札幌を發たれる。笑顔の中に何か淋しさが漂ふている。菅沼は青年寄宿舍の名に恥じない行動をして来ますと宮部先生に誓ったと、何時になく、しめっぽく語る低い而し堅い決意から迸る一語々に頼しき帝国軍人となるであらう菅沼さんを見上げ、緊張を覚えた。只々菅沼さんの御健康と武運長久を祈る次第である。（佐本記）

十月十二日（火）秋も益々深まる。舎は平和なり。副舎長は今、何処でなにをしてゐるのか。菅沼さんを送って舎も何がなしい物淋しく落着かぬ。

十月十三日 晴天 全学会の為（休日）

小春日和のよいお天気。皆うちそろいて、何処にか、ハイキングをする？小生は、学校の教室の連中と伴ひて、発寒川に遠足する。三村、田崎両君が主になって、書籍の整理をなす。長年見なれた本棚は、十二号室に移転され、十二号室が新しい図書室となった訳である。整理上、捨てられし書は、舎生の間売り出さる。

十月十四日 全学会二日目の催しあり、授業なし。小生は絵を書き、林檎を食ふの遠足を、級友を集って簾舞へ。図書はすっかり整頓されてゐる。新しい感がして嬉しい。電車の中で、先輩の奥田先生に逢ったが、挨拶せず。残念に思ふ。

十月十五日 朝、新副舎長、飯島寿君、長い旅行より帰って来られる。舎にも新しい主人が見へて、落付いた気がする。以上（望月）

十月十六日 靖国神社秋の臨時大祭の日。新しく一万余柱の護国の英霊、靖国の宮に神と祭らる。この日、舎の先輩、田村さん召されて、朝、札幌を離れられ、舎生駅迄送る。

十月十七日 朝、北野君、徴兵検査の為帰郷。予科医類二年草地、農類二年小杉の両君本日入舎。夜、舎生大挙して「ヂャ香猫」とやら云ふ映画を観に出掛けて舎内ひっそり閑とどてゐる。遅く河村君旅行より帰舎。 飯島

十月十八日 夜石川君臨時徴兵検査の為帰郷。夜久し振りで食堂に畳を敷きスキヤキ、米四升。

十月二十日〔十九日欠落〕夜リンゴ三個当る。カボチャもにたとのこと。たまに早く寝たので食ひそこねた。 飯島

十月二十一日 めっきり寒くなった。飯島副舎長、帰途に就く。望月氏と小生、“格子無き牢獄”を見に行く。この映画に小生が予科に入って間もなく、K先輩につれられて見に行った、初めての外国映画で、“映画とハかくも美しきものか”を痛感したのであった。当時の随想録を読んで見ると、えらく感激して、其夜ハ遂に何も手につかなかった様である。往年の感激を再び新にして、見て来た。

十月二十二日（金）望月さん、岩瀬君、朝七時半離札。徴兵検査を受けるため帰省。めっきり寒くなった。下駄穿く足がきりきりする。 中村

十月二十三日（土）遂に白いものが降って来た。寒々とする。木の葉は散る散る。北風が着物の裾を奪ふ。図書閲覧室の天井高い暗い室で火鉢囲んで夕食を待つ。外は冷たい。早く床に就く。「明日は日曜日だ、寝るには早い」傍らの書棚から“何処へ行く”を取り出して読む。 中村

十月二十四日（日）晴天 本吉、中村、内田、河瀬等豊平へ郊外散歩（？）に出かける。大分寒さも加はってきた。そろそろストーブが欲しい。然るに、舎には未だ石炭が来て居ないとの事、心細し。 河瀬記

十月二十五日（月）臨時徴兵検査行ナハル。リンゴ七個配給アリ快的快的!!七名検査ノタメ帰省シ火ノ消ヘタ様ニ静カナリ。臨時議会開カル。（本吉）

十月二十六日（火）三村さん徴兵検査のため勇躍“水戸”へ。健康を祈る。夕食時の淋しい事。駄洒落の一つも飛ばしたいのだが、野尻外出、太田さん、中村さんと一緒に街へ。図書室にストーブが設置、俄然色めきたって、諸々の人、此の部屋に集って散らず、汗かいて勉強してゐるなど殊勝此の上もなし。八時に南瓜の饗応あり、稀にみる、否味はふ美味にして、茶の香も高し。穢い上履がごちゃごちゃ重なり合って御主人の寝る迄此の部屋に門番らしい。パン一個十銭也が配給、味美し。明日は又誰かゞ居なくなるのかしら。現在の所、田崎さん、副舎長代理。銀杏の葉、電車路に舞ふ。（山本記）

十月二十七日（水）近頃は検査で帰った人の為、舎には数人で、夕食も寂しいものだ。内田

十月二十八日（木）電燈料と秋葉さんのマル通請求に来る。電燈は先月四つ休燈したにも拘らず、前と同じ様に¥3〔次は2?7?〕50請求して来る。怪しからぬ。夜、内田

徴兵検査の為、内地に向ふ。河瀬、草地の両君、顔に腫物をこしらへて弱ってゐる。何でも風呂からの系統らしい。近頃の風呂に充分注意すべし。 田崎

十月二十九日（金）右顔面腫らして大弱り休む。一日蟄居、読書。昼頃霰ちらつく、寒し。

舎はひっそりとしてゐる。夜雨降る。頭ががんがん痛むので早く床に就く。草地

十月三十日（土）午後皆協力して食堂へストーブをつけた。早速燃やしてみると、快的にもえ一安心。夜ストーブのまはりに集り、ジャガイモを煮て食ひ、十二時頃までトランプをして非常に楽しい夜だった。

十月三十一日（日）山本君のお母さんが舎生に昼食を御馳走して下さった。夜またトランプが始る。

十一月一日（月）リンゴ四つ、柿二つ配給。一年生アルバイトに出発。室が寒いので自然食堂のストーブのまはりに集り賑になり又トランプが始る。毎晩毎晩賭バクの開帳みたいである。 K

十一月二日 火曜日 雨 朝からの雨に寒々とする。昨夜は岩瀬君が、一昨夜は石川君が、徴兵検査から帰られる。「石川君甲種、岩瀬君第一乙種」、立派立派。食堂のストーブがあかあかと燃える。六七人が好都合である。又エッセンか？トランプか？自重自重。

十一月三日 水曜日 晴 昨日とは打って変わった秋晴れの朝日を浴びて明治節〔一字不鮮明、祝？〕賀式に参列する。講堂は例によって適當の入りであった。昼には班の大根運びを、夜食後は舎への大根運び及び漬物樽運搬をやる。此の所小生休み中のものを取返すべく大童の状態である。蟄居許され度し。 石川

十一月四日 木曜日 室にストーブはないので此の頃食堂に夕食後の大部分を過して居る。此所で居眠りするも本読むも将棋するも勝手である。室に帰っては直に床に入る。ルッソオの懺悔録手にした儘ウトウト。騒音に目を覚ましたら又南瓜煮得たらしい。起出すのは億劫だし第一寒い。その儘寝る。 中村

十一月五日 金曜日 急に寒さが加はったやうだ。部屋にはまだストーブがついてゐない。それで、みんな夕食後は、食堂で駄辯ってばかり居る。今朝北野君、徴兵検査より帰舎、第一乙種合格、視力が不足とのこと。 河瀬

十一月六日 土曜日 曇小雨 午後から小雨模様になる。中村君と二人で学校農場から白菜、甘藍運搬す。今年の今日ノ日誌に「ストーブが良く燃えて非常に暖い。各室も静かで読書にふけてゐるらしい」と。悲しいかな、まだ石炭配給されぬ。（本吉）

十一月七日 日曜日 雪、曇 朝目をさましたら随分寒い。窓ごしに未ださめやらぬ眼が少し変だ。眼鏡を掛けたら雪だ。あゝ雪か・憂鬱だ。今日の日曜面白くない。徴兵検査も終って、何かしら又落着かぬ。落着かぬ儘に色々考へる。夜寒さの為早くねる。一日も早く戦場に出たいと、切実か感傷か知らんが、しきりに思はれる。当分の間自分の考へを纏めるべし。 北野

十一月八日 月曜 大詔奉載日。別に変った事なし。寒い。

十一月九日 火 文化講義あり。望月さん昨夜帰りエッセンあり。

十一月十日 水 寒い、寒い。ストーブのない部屋は、ねるのみの部屋なり。

十一月十一日 木 寒い。他に変わりなし。菓子配給あり。 北野

十一月十二日 金 山本帰舎、病気ノタメ。林檎に梨ノ配給アリ。夜副舎長帰舎。三村

十一月十三日 土 ストーブ恋し。続々としてストーブ取付けをする。

十一月十四日 日 曇 秋雨に、雪も形なく消えて、うそ寒し。ストーブの取付け、大体に於て完了。大根、薯は冬籠り。楡の木は秋の暮の色、褐色。早く夜が来れば良いなあ。

山本

十一月十五日 (月) 食堂のストーブの円筒掃除を本吉君と小生がやった。円筒には随分すすがたまっていた。馬鈴薯を、フライパンで薄切りにした食べる者あり。晩、記念祭の委員を決める。 (内田)

十一月十六日 (火) 内田君、記念祭用のエッセンの交渉に出掛け、外泊する。(田崎)

十一月十七日 (水) 昨日迄暖かった天気は、今日になって又元の寒さになった。飯島副舎長御身ら、石炭配給所へ行かれて、問合せの結果、今年の暮でなければ、馬車の関係で、全然輸送の見込が立たぬとの事で、聞いて、益々ふるへる話。二丁程離れた配給所へ行って交渉せんとするも、係員帰宅後とてラチがあかず、明朝を期して出掛ける事とする。来年は斯くの如き事がない様、呉々も、皆で注意し合はう。本日又々十六時三十分の海軍発表で、海軍航空部隊の第五次ブーゲンビル島沖の戦果が発表になった。之によると、轟沈大型航空母艦一隻、撃沈中型航空母艦二隻、巡洋艦三隻、他一隻(艦種未詳)であった。野尻君本日帰舎、伯父さんの処で外泊する。これで、寄宿舍の舎生は一応全部揃った事になった。 (田崎)

十一月十八日 (木) 雪が降って寒い。是非とも石炭を早く手に入れたいものだ。室に居ては何にも手だしが出来ず結局床について一日を終ふ。戦果撃沈、輸送船二、大破輸送船一、炎上、駆逐艦一。

十一月十九日 (金) 放課後舎生一同、ソリにて石炭の配給を取りに行く。今夜からストーブを焚く。配給はバケツに六割なので少し足りなささうだが、始めてなので良く燃える。何日かぶりかで机に向ふ。各室とも猛勉強中らしく、静かなり。生心地を感じず快適な夜だった。 岩瀬

十一月二十日 舎生、ソリにて又石炭をとりに行く。楓林の原稿本日十二時迄。各室張切って深更まで書いてある様だった。定刻より二時間遅れ、午前二時、小生やうやく書きあげてホツとする。本日決算を行ふ。 河村記

十一月二十一日 日曜日 記念祭も近づき、準備に色々と忙しい様である。飾りつける道具なども散在してある。昼食は中央食堂は休み。キョウさいぶでもフラレて腹をすかして帰る。外の人八勇士は町へ食べに行った様だ。飯をたいて食って生き返る。夜は学部の人々、記念祭の劇練習に余念無い。当日の盛況が待ち遠しい。 野尻記

十一月二十二日 月曜日 記念祭を明日に控へて夫々のグループに分れて何をか練習して  
ゐるらしく、突撃、話声が聞える。次第に声も大きくなり歌も聞え出、踊るらしいハヤ  
シの声も聞える。浪曲も漏れて来る。明晩が期待される。草木も眠るウシミツドキには  
未だ早い十時前に、舎の前の電車通りの九丁目の通りの辺りから、うら若いメツチェン  
の悲鳴が、若い血のたぎる舎生の心臓に響いた。事の重大さを早くもさとった、東側の  
部屋の方は窓を開けた。電燈を出した。怒鳴った。この臨機応変の処置は、このメツチ  
ェン一生を救ったやうなものの、今時一人で歩くのも感心せぬ。情に弱い男、内田君が  
家まで送り届けて〔「記念祭」のシールで数字不明〕に感謝されたそうだ。〔同〕なけれ  
ばならぬこの時節に社会のこのやうな事実を見せつけられて変な気がした。(佐本記)

十一月二十三日 火曜日(晴) 待ちに待った記念祭。朝から快晴に恵まれて舎生総出で  
飾付に食事の用意に活躍する。忽ち幼稚園の学芸会の如き会場が出来上がる。〔会場飾り  
付けの概略図あり一食堂内東側の壁に白幕。その真ん中に式次第の紙、幕上部にX字に  
交差した日の丸の旗。南側は四つの窓と食卓、ストーブの図。西側の壁には花らしき飾  
り。北側の壁には、紅白の幕と「記念祭歌」の張り紙。天井近くにテープの飾りと横線  
地に丸印、星マークの旗〕

御出席者。宮部先生、河村氏、北村氏、前川先生、亀井氏、時田氏。午後三時半開催。  
一、国民儀礼、記念祭歌斉唱、一、副舎長以下舎生祝辞並に内田君壮行の辞、一、内田  
君答辞、一、諸先生、先輩の言葉、一、宮部先生お話。中でも内田君の勇ましい答辞は  
舎生一同に深い感銘を与へた。宮部先生よりは、禁酒禁煙の一層のお訓しと共に内田君  
の壮行に際して次の如き御歌を下された。

時や今 征くも留まるも国のため

力の限り 盡さざらめや

次で晩餐会に入る。献立を〔一字不明〕く。チラシ寿司、鮭フライ、アスパラガス、玉  
葱あげ、刺身、野菜と蛸の酢味噌、野菜肉の汁、更におはぎ五個、林檎、柿。

日頃その方面の猛者連中もいささかたじたじの態であった。併し宮部先生はお身体具合  
の為の別製の料理とは云へ殆ど平げられたには、いつもながら慶ばしいことであった。

七時頃閉式、先生方をお送りしてから愈々余興に入る。奇芸、珍芸続出、抱腹転笑止る  
を知らざるものありき。就中北野君の唱と踊り、内田君、本吉君の〇〇の場等その著し  
きものであった。昨夜の事件の影響の多くを見たが、子供達の為にどうかと思はれた。

次にこのプロをざっと転載して置く。①とりざぶし(河瀬、岩瀬、内田、本吉、草地、  
佐本)②歌(山本)③父帰る(父=北野、賢一郎=河村、おにね=小杉、石川、新二郎  
=中村)④馬鹿げたまね(野尻)落語(河村)⑤娘支那より来る(北野)⑥船中の滑稽  
(河瀬、岩瀬、本吉、佐本、〔二字不明〕内田(浪曲))〇〇(内田、本吉)⑦歌(望月)  
⑧舞踊(本吉)⑨新編宮本武蔵(武蔵=山本、〔二字不明〕=北野、お通野尻)⑩歌(増  
原さん)⑪ある夜(〔一字不明〕村氏=本吉、その妻=中村、三日月氏=草地、志村氏=  
佐本)⑫黒田ぶし(増原さん、内田、河瀬、本吉)歌(増原さん)歌(本吉)詩吟(山



本) ⑬それから (内田大尉=三村、その妻=田崎、北野博士=飯島、三村=望月)

次で南瓜汁粉の饗応あり、すしの残りももち出しつめるだけつめる。後片付けの後、賞品授与。団体賞1、それから2、父帰る。個人賞、北野、三村、本吉、内田、中村、田崎、河瀬。石川〔欄外に「抜けた所は適当に補って下さい」の書込み〕

終って内田君に記念品贈呈、国旗に署名。壮行ストームに腹こなしをしてから一同寝に就く。時当〔?〕に一時。終に昭和十八年度記念祭は終る。又来年、併し来年卒業される人々には最後のものとなった訳である。更に午前三時頃黒田節に始まる長ストームあり。舎生の熟睡を破る。増原さん一泊。

十一月二十四日 水曜日 昨夜の睡眠不足にも不拘、皆よく起きた。本日午後五時の汽車で内田君が発たれることになって晚餐を共にする筈であったが、更に明日に延期された為晚餐にも少し狂を生じた。ストーブは快適に燃える。今夜は早く寝よう。

十一月二十五日 木曜 石川君から日記を受けてから、部屋の片隅においたまゝ忘れてしまつていたので、この日以後の日記は、十一月三十日の今日書かねばならない事は、在舎生諸兄に対して、非常に済まない次第です。

内田君はこの日、十七時00分の急行で、一と先づ東京へ帰って行かれた。駅頭には、日頃、彼を大辺可愛がつてみた当副舎長飯島兄を先頭に在舎生一同及び林実のクラスメイト多数の見送人と、亀井先生の見送りで、大辺賑かであった。自分は、林実の人達の元気よく、出発の元気づけの歌を唄つてゐる際、この人が飛行機にのつて、大いに手柄を立てゝくれるのかと思つたら、涙さへ催されるのをどうしやうもなかつた。内田君が飯島君や自分の方に向いて「では行きます」と言つて、デッキの方へ乗つて行かれた、後姿を思ひ浮べて、彼の淳朴さを偲んでゐる。落磊だった内田君が、取り円〔?〕巻く見送り人の真中に立つて、頭をうなだれてみた、心の内はどんなだったらう。御国の為には命をも投げうつて、行かうとする、彼の熱烈たる愛国の情に、誰が泣かない者がみやう。かうやつて、日記を書いてゐると、吉田松陰の「親思ふ心にまさる親心」と絶句を読んだ気持や、また、内田君の母さんは息子の飛行士になるといふ報を受けたときどう思つたらうとか、妙なことが種々思ひ起されて、感傷的な気持になつてしまふ。自分といふ人間は、駅頭に於てすら、他人に元気をつけてやる前に自らの中に、悲しい様な寂しい感情を持って、どうしても、林実の人達に伍して、大いに歓送の歌を怒鳴ることが出来なくなつてしまつてみた。人の列の後に立ちすくんで「ぢや元気でやつてこいよ」と言つたのみであった。

十一月二十六日 金曜 学校から帰つて来たら、掲示板に内田君の入當する部隊の名が記してあつた。陸軍の飛行士になることになつてゐる。宮部舎長先生が北野君に「内田は立派な兵隊になるわ」と言つたお言葉や、河村先輩が「兵隊には死ぬべき所がある。犬死はやめろ」と言はれた言葉、等色々、取り集めて、内田君の兵隊ぶりを想像してゐる。ギルバート諸島の戦果あり。航空母艦三隻撃沈その他…

十一月二十七日 土曜日 寄宿舎内平穩。だが、一つ又問題が持ち上つて来た。記念祭の

時、舎長先生が舎生の禁酒禁煙について心配されてみた一件である。副舎長の責任問題であるが故に事は重大である。その事について、賄の小母さんが、目の仇になってしまった。

十一月二十八日 日曜日 朝、七時頃、防空演習のため、皆学校警備に行くもの、寄宿舎の警備につくもの一際にとびおきる。演習約一時間、空腹を抱へて寄宿舎にもどり、熱い味噌汁に舌うちし、手足を温めれば、睡魔漸く迫る。晩に副舎長室では何かあったらしい。太い声、細い声、時には涙声までの合唱である。

十一月二十九日 小生、殆ど一日中外に居たため、舎内の容子は知らず。只知る、南果の大戦果。ギルバート沖の大戦果を。航空母艦五隻、巡洋艦三隻撃沈破のそれである。

十一月三十日（火）京都左京区役所より、内田君宛に本日午前八時、京都駅前集合の速達が昼頃来た。官吏の非常識にあきれる。

十二月一日（水）寒気つので夜降雪、風も強まり夜中遂に停電。本日学徒入営の日。

十二月二日（木）中村、佐本、本吉の諸君、石炭運びのアルバイトをする。夕方又停電。電話を散宿所にかけたら直ぐ来てゐる様な話しであったので暗黒の中で光の来る時を待ったが遂に来ず。

十二月三日（金）桑島さんが退舎したいと申出た。結局こゝに至った根底の原因は舎生とおばさんとの人生観の相違によると思ふが、又我々の反省して見なくてはならぬ点多々ある様に思ふ。夜班の常会に出る。此頃では、公区と云ふものから独立した生活が不可能になって来たことに痛感する。

十二月四日（土）望月、三村両君と宮部先生の処にうかゞふ。桑島さんのことをよく話さうと思ったが、先生の温なお顔を見たら何も云へなくなった。 飯島

十二月五日 日曜日 朝食九時半。午前中、ストーブ附ける。一時間、十一時にハ、町へひるのエッセンを買ひに出た。午後友達が来て、三時迄駄弁る。夕食、みそしる丈にハ、がっかりした。今の時代にハ、夕食丈が、我々の唯一の楽しみになってゐる。外にエッセンが無い。一刻も早く、真心のこもった夕飯が食べたいものである。夜知人宅をたづね、賄の小母さんの件を相談して見た。 三号室

十二月六日（月曜日）薄曇 今日少しあたたかい。午後、戦闘教練を雪中で行ふ。午後四時臨時報道あり、敵、我が南洋群島中のマーシャル諸島附近に来襲せしとの事。敵の反攻いよいよはげしくなる。同じく「印度カルカッタ空襲せし」と発表あり。夜は試験の準備に猛勉した。（四号住人）

十二月七日（火曜日）朝から近頃でない雪降りである。夕方は曇りとなって海兵団入団の友を送りに出てすっかり濡れた。二年一名一年三名の門出を祝ひ猛烈なストームをした。斯くて出陣の友は皆出発して了った。寂寥の感に堪へぬものもあるも邦国のため之をしのび我等も亦続かねばならぬ。

十二月八日（水曜日）晴 大詔奉際載日。暴疾〔？〕極まる米英の態度に遂に堪忍袋を切り干才〔？〕をとり宣戦の詔を拝して満二年。一億決起、大東亜戦争第三年目に入った。此の日本学に於ては八時半より中央講堂に於て大詔奉載式あり教職員学徒満堂、更に溢れて外に多数並び近來にない壯觀であった。ついで札幌神社及び護国神社参拝の行事に移り聖戦完遂祈願と英靈に感謝の参拝を終へ、その体形〔？、続く二字は「人て」と見えるが意味不明〕松竹座に至り、海軍人事部長角田大佐の講演と映画「海軍」の上映あって、本日の行事が終った。実に近頃の戦局は容易ならぬものあり、量を恃んで多大の犠牲も顧みず総反攻を呼号して来る敵の勢は侮り難いものがある。本日大本營の発表によれば敵に与へたる損害、米軍二十七万、英軍十二万、我が方の損害十五万九千なる由。尊き此の犠牲に対し満腔の感謝を捧げるものである。（中村）

十二月九日（木曜日）雪も已に、二十糎余りつもってゐる。いよいよスキーのシーズンが近づいて来たが、スキー上手？？？な我輩には、さっぱりうれしくない。予科、試験近づき、みんな頑張つてゐるらしい。

十二月十日（金曜日）月の冴える晩である。一面に星も輝いてゐる。星は蛍光の如く見える事を欲してゐるのだらう？寄宿舎の夜は静かだ。皆この音楽に聞き惚れてゐるのだらう。時々スリッパの音、床のとる軽い音も聞へる。（本吉）

十二月十二日〔十一日の誤り〕（土）大雪である。今年の今頃も亦、私は此の日記にこんな事を書いた。今年中に舎の日記をつけるのも今日が最後であらうと。試験も全く、あと一寸に迫つたのに、どうしたんだらう。少しも身を入れてやれない。心があせる許だ。いつもいつも試験の前に味はふ味である。あと毎夜ねたら家に帰れるかと考へても、その間には、大きな物がある。ひるはオートミル等の買出しでつぶす。家の土産、夜はイモが出る。机に向ふとすぐ居ねむりしてしまつて朝の感じのいやな事。今迄にない消耗の仕方だ。此の大いなる時局の中で何でも勉強にすら心が打ち込めないのだらうか。試験の前の頼りない気持には、故郷の土の偉大なる引吸力を感じる。（北野）

十二月十二日 日曜日 積雪二尺有余、鋭角的な稜は此の“自然の巧み”に悉く失はれてゐる。都会独有な神経質な音響も、雪にくゞもつて、一種の静寂を招く。“雪は降つても敵機は来る” 万一の場合に備へて、道路の除雪作業が行はれた。雪は斯くして、人に安静を興へると同時に、かゝる時局なるが故の緊張の対象となる。試験は近い。早寝遅起の結果山積した勉強にさて、何処から嚙りつかうかと、当惑して仕舞ふ。因果応報“教室居眠り”の罰は此の緊迫した瞬間に襲ひかゝる。それでも、昼飯になると、眼の色變へて、中央食堂で二杯、共済部で一回と、親泣かせの消費を敢てして、而も帰舎するや、おじやも腹につめこむ。將に餓鬼道中の旅人である。“今夜は肉鍋の御馳走があるんだつて”と眼を細くして喜ぶ、彼の顔は仏に近い。冬は運動不足から来る胃腸活動の不振の期であることを百も承知で斯くも食ふ。便所裏の会議ではないが、便所の裏で、子供達に混つて、スキーをやつてゐる。彼の顔は無心の極、子供のやり方を見て、“下手の横好”なりと、自己の技倆にあきらめをつけるのも哀れである。奥手稲に快的のス

キーの味を感じ得る三村、望月、本吉さん達こそ羨ましい。吹き嵐しの風に粉雪は顔にふりかゝって、眼も明けられぬほど飛び舞ふ。 (Y生)

十二月十三日 月曜日 午前十時から栗原大佐の講演あり。小生、昨日よりの風邪悪化し、一日中ね込む。

十二月十四日 (火) 今日も頭が痛くて寝込む。

十二月十五日 (水) 本日は交流理論の試験があるので頭の痛いのををして学校へ出る。学校のスチームは余り通らず、ふるへる。

十二月十六日 (木) 予科生は愈々今日から試験で、寄宿舍は静かである。乾パンの配給あり。

十二月十七日 (金) 実科は明後日より休みとか、学部は何時からか、二十五日頃らしく、少しがっかりする。石炭は未だ運んで呉れぬのに、新聞には、石炭配給会社の談といさて、申し込んで四五日すれば来ますよと全く不ざけた事をぬかす。

十二月十八日 (土) 小母さんが二十一日迄しか居て来れぬので、後任を探し回ってゐるが、オイツレとはないので、困る。

十二月十九日 (日) 予科試験の中休みを、忙しげに部屋に閉ぢこもって、勉強してゐる。実科の人達は休暇になるとか言って、帰省に忙しい。

十二月二十日 (月) 予科の連中は、あと一日だとか言って、試験後の帰省を夢見てゐる。小母さんは二十一日迄在舎する意志を示す。我等、自炊の覚悟を決し、小母さんの退舎を許可す。それにしても、案じられるのは、後任の方である。佐本君本日より欠食、中村本吉両君帰省。

十二月二十一日 小母さん、米、糯米、麦粉、豆等分けて貰ひたき旨申し出でたるに依り、事の円満を思ひ、米その他、二円程興へたり。その晩、試験終了の喜びと供に帰り行く者一人、河村君。残留組自炊の用意始めぬ。

十二月二十二日 朝、吾等、床を蹴って、飯を焚き汁を煮る。十一人の者の食をそろへぬ。この日六時の汽車で野尻君帰省を始めとし、山本、草地、北野、田崎、小杉、石川の諸君矢継早やに帰る。夕食は予科生及び、本科マンの三村、田崎両兄等の献立になる、茶飯と納豆、煮つけ等の簡素なる料理出現、小母さんと母子を御馳走してやる。小母さん、御礼にか、金一封(五円)を下さったが、返上する。夜、ストーブをかこんで、オートミルの美味に、空虚なる胃を満す。総勢四名。 (望月記)

十二月二十三日 早朝岩瀬君飯も食はずに帰省する。朝飯は、味噌汁と納豆の美味に舌打ちし、晩は、三村君の手になる立派な料理に陶然として、自炊の快適さを十二分に味わふ。小母さん、未だ移転完了せず。吾等、相変らず十一号室に、自炊の宿を決めこんで、くすぶってゐる。河瀬今晚より寮へ合宿へ行く筈なのを翌朝にする。

十二月二十四日 自炊生活でこまることは、勉強といふことが、自炊といふ、日常茶飯事で妨碍されることである。小生は今日最後の授業を休んだし、飯島君や三村君も今日迄相当犠牲になってゐることは、否めない事実である筈である。今の様な事態になつたこ

とは、吾々の運命である故にこの困難にぶっつかって行かねばならない。今朝河瀬君の中学の後輩といふ、柔道二段といふ、古宇田君（帯広中学五年生）現る。高等商船の受験に来る。晩飯は小生義理で他家に招待さる。他の人達は皆「はちまき」に夕飯を食べに行く。小母さんの引越し進捗せず、吾等手ぐすねして待つ。

十二月二十五日 古宇田君が七時半に出発するといふので、吾々は、張切る。小母さんが今日出て行くについて、五円飯島君におしつけたといふ。吾々はそれを貰ふに僥びず、以前渡辺健さんの五円を小母さんに渡したのに、忘れたとって返されなかったものあなうめにするにことにした。吾々は小母さんが出た勝手の間に、自炊の部屋をうつした。それと同時に、戸棚や煙突の掃除もやった。夕食は、牛肉の天婦羅や、味噌汁をつくって、食べる。

十二月二十六日 朝は三村君が早く起きてくれた。古宇田君は、昨日の数学の試験がわかったとぼんやり出て行く。国谷さんからうすをかりて来たり、「あん」をつくったり、糯米をといだりして明日の餅搗の用意をする。小母さんが居ず、のびのびとした感がある。人の虚ををそひ、専ら非難を事とし、自らの誇大妄想を満足させたり。自らの心を内省することもせず、他人を批判することを好む様な人に対して、吾々は敬意も親密な情も持つことは出来ない。

十二月二十七日 今日は朝から持搗である。餅米をふかしてノシ餅を作り上げる迄、総ては吾等の手で!!「餅は餅屋」と言ふ諺があるが吾等はこの諺が虚偽なることを証明せり。拓ちゃんの鮮かな手さばきを見よ、政ちゃんの連続百回のキネ振りを見よ!!生れ出でたる餅の何と柔き感触と靱り強き弾力性に豊んだことか!!古宇田君今夜帰る。この堂々たる快男子、年頃の乙女の様によく笑ふ。

十二月二十八日 自炊生活愉しきかな。朝起きると政ちゃんが水加減の実によい御飯を炊いてくれてあり、近頃飲んだことのない様な快適な味噌液が出来てゐる。漬物は余が出す。夜は拓ちゃんの美事な創意と工夫になる、料理屋も及ばぬ様な御馳走が出る。余は専ら茶碗洗ひである。あゝ、手が荒れる!!

十二月二十九日 朝、望月さん、起きてみそしるを作る。黒豆の飯ハ前夜の残り物。一昨日のソース入りざうにが残り残って、今朝のみそしる中にまだ残入して居る。この調子で行けば、∞の日数が経たねば、ソースの入らぬ味そ汁ハ食へぬわけだ…ひるハ、朝のソース入りみそしるに、もちを入れて食ふ。夜ハ、鱒の天ぷら、快適!!六時頃、宮部先生の御宅へ伺ふ。それから小生ハ知人宅へ一夜、牛乳に砂とうを入れて、外に出して置いた。アイスクリームをつくらんとせしなり。

十二月三十日 早朝直ちに昨夜の牛乳を見たら、容器の縁丈氷って居た。矢ハリ、攪拌せねば、だめと見える。昨晚同様に外に出して置いたしるこハ、少しも氷ってない。さとうとサラシコのdensity大き過ぎた。あさめし十時、ひるぬき、一時半、ざうにをつくる。夜、シチュウー。飯島御大将、夜ハ、土木部長、梢任技師の御宅へ御訪問せしも、るすにて振らる。帰舎せば即、暖きストーブの傍にてグーグー。最近、床屋に行

って、其の為ならん、到る所でm e dにセンセーションを捲き起さしめてゐるらしい。

〔この後、三ページに渡り、戯画的なスケッチ三コマあり。一コマ目は、ストーブの側に寝そべって読書する舎生と、本を開いたまま「グゲー」といびきをかいて寝込む舎生。これは三十日の日記にある「飯島御大将」らしい。二コマ目は、籐椅子らしき椅子に腰掛け分厚い本を読むドテラ姿の舎生。ストーブ側のちゃぶ台には食器、床には釜があるから、賄の小母さんが退舎した後、そのお勝手を利用した自炊室か。三コマ目は、「夕食之図」とあり、ドテラ姿の舎生二人がちゃぶ台で食事をしている様子。一人の前に三つの食器があるから、一汁一菜の質素な自炊風景らしい〕